魔法少女リリカルなのは～Nameless Ghost～（Route NORN）

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～Ｎａｍｅｌｅｓｓ　Ｇｈｏｓｔ～（Ｒｏｕｔｅ　ＮＯＲＮ）

【Ｎコード】

Ｎ２８０６Ｎ

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

ＮＯＲＮ＝ｔｈｅ　Ｎｅｘｔ　Ｏｆ　Ｒｏｕｔｅ　ＮＭＬ。前作Ｎａｍｅｌｅｓｓ　Ｇｈｏｓｔ　Ｒｏｕｔｅ　ＮＭＬの続編となります。闇の書事件の終了し、事件そのものは最小限の被害に食い止められた。良いこともあり、悪いこともあった。得られたものがあり、なくしてしまったもの、背負うべきことや消えない傷も多く残された。この物語は、そのような何かを背負ってしまった少年少女達の物語となります。（何かお気づきの点、例えば誤字脱字や、設

定の矛盾や、キャラクターの思考や行動や言動に関する違和感がありましたら、お気軽に指摘していただければ幸いです。よりよい作品にしていけるよう、ご協力をお願いいたします）

第零話　Samsara

今でも時々夢に見る。目蓋を閉じれば今でもはっきりと思い出すことが出来る。白一色に染められた部屋の中で、チューブに繋がれてただ安らかな表情を浮かべ眠り続ける彼の姿。

永遠に消えない傷が与えられた彼、そして、その原因となった自分を許せないという心。気を抜けば、記憶とともにその感情を置き去りにしてしまいそうになり、彼女は夢に見るその光景にどこか安堵の息をつきそうになる。

どうして彼――ユーノはこれほどまでに穏やかに眠ることが出来るのだろうか。

それはまるで何かを成し遂げて、一切の後悔もない人の浮かべる表情のように思えた。まるで彼の人生がここで終わってしまったかのような、そんな錯覚さえこみ上げてくる。終わって欲しくない、どこにも行って欲しくない、側にいて欲しいと願っても願っても彼を終わらせてしまうのは結局自分になるのだろうと彼女はどこか確信めいた思いを浮かべてしまう。

（私のせいだ）

ただそんな言葉が彼女を責め立てる。

（ユーノ君が傷ついたのは私のせいなんだ……）

誰にも口にしない自責の念が感情を細く硬くしていく。決して誰にも明かしてはいけないその思いは閉じこめられているうちに肥大化していき、今では大洪水のように体中を駆けめぐっていく。

誰にも告げたくない、なぜなら、誰かに告げればきっと自分は許されてしまうから。彼に告げれば、何もなかったように髪を撫でられにっこりと微笑みを向けさせてしまうだろうから。彼にそんな顔を向けられれば、縋ってしまう。私は許されてもいいのだと思ってしまいそうになることを彼女は恐れ続けた。

（もう、誰も傷つけたくない。もう、私のせいで誰かが傷ついて欲しくない）

彼は彼女を守るために傷ついた。その後も、彼は誰かを守り助けるために傷つき続けた。そして、彼は魔導師としての生涯を終えた。それでも彼は立ち上がって前を歩き続けた。

（だから、私は……）

この記憶だけは絶対に風化させてはいけない。

もう二度と繰り返さないために、もうこんな後悔をしないために彼女はこうして後悔をし続ける。それはまるで、止まらない車輪の如く回り続けて、渦巻く感情にさらされて悲しみが訪れる。しかし、彼女は涙を見せるわけにはいかなかった。涙を見せれば彼は悲しむだろう。その涙が、彼を原因として流された物だと知れば、彼はまたここに戻ることになるかもしれない。

二度と繰り返したくない。涙も悲しみもここに置き去りにして、ただ自分は後悔だけを持ち帰ろうと何度も何度も彼女は心に誓った。

そして、彼女はまた眠りにつく。

眠りの中で沈む眠りは、薄暗い奈落へゆっくりと落ちていく感覚に似ているように彼女には思えた。

二度と繰り返さない。その決意だけを胸に抱いて彼女は落ちていく。ただ落ち続けていく。すくい上げる手も、導光の輝路もいらない。ただ後悔だけがあればいいと彼女は何度も何度も心に刻み込み、また一つ傷を増やす。そうして傷を得ることで、彼に与えられる傷を一つでも減らすことが出来るのならと思いながら、彼女は夢から旅立つ。

そして、その思いもまた彼の負担になっていくのだろうと彼女は思いながら夢の世界に別れを告げた。

第一話　Again　and　Again

ぼやける意識の向こう側からは機械が駆動する乾燥した音が響いてくる。それらは次第に耳の奥で広がっていき、その感覚は否応なくなのはを夢から現実へ誘うようだった。夢から覚める瞬間はこちら側とあちら側の感覚が入り交じり、自分はいったいどちら側にいるのか分からなくなってしまう。

（また、あの夢か……）

僅かにノイズの混じる意識に軽く頭の端を押さえながら、意識の定まらない声を漏らしながらゆっくりとまぶたを開いた。にわかに像がぼやける視線に映るのはただの灰色の色彩で、そこは幾分か広い空間に思えて、なのはは幾度か瞬きを繰り返し、自分の目が周囲の様子をしっかりと認識できるまでじっくりと待ちながら周囲を眺め回した。金属質な壁面が閉ざす空間には窓が無く、いくら見回してもここがいったいどこどこだったか、なかなか思い出すことが出来なかった。飾り気のない室内のようでいて、その中央の天井近くに掲げられた大鷲の紋章がどこかこの空間自体を荘厳な様子に仕立て上げているようだった。

その紋章を何となく凝視しながら、高町なのはは頭の横から胸元に落ちる髪の束を背中に回し、ようやく自分がいる場所を思い出すことが出来た。そして、自分の目の前の端末と数枚の紙の書類が散らばるデスクの向こうへと目をやれば、広い机の周りにいくつものモニターを展開させながら難しい表情をする幼なじみの少女の姿があった。

「はやてちゃん？」

見慣れた管理局の黒い制服に身を包むなのはの幼なじみ、八神はやてはなのはの呟くような声に気がつき、半透明の空間投影式モニターごしになのはを見た。

「うん？　ああ、起きたんや。おはよう、なのはちゃん」

頬杖をついてどことなく惚けるようにモニターを眺めていたはやては、突然聞こえてきたなのはの声にそのまま緩い感覚を保ったまま方言混じりの声を返した。ひょっとすれば、彼女もまた寝ぼけているのかもしれないとなのはは思うが、彼女の前に広げられたモニターの進捗状態からは彼女が寝ていたという形跡は確認できず、自分だけ勝手に居眠りをしてしまったことを恥ずかしく思った。

「寝ちゃってごめん。すぐに取りかかるよ」

なのははそういって目の前のテーブルに置かれた小型端末を取り上げ、（当たり前だが）眠る前と何ら変化のないモニターに手を置いて忙しく指を動かし始めた。

「まあ、報告書なんて別に明日でもええんやけどな……」

はやてはそういいながら広げっぱなしのモニターの一部を消しながら両腕を広げて背筋や腰を伸ばしながら「あ〜〜しんど」とまるで仕事に疲れた中高年のようなため息をついた。なのははそんなはやての様子を上目でチラリと見ながら苦笑を浮かべる。そこにいるのは先ほどまでアースラの執務官として武装隊を指示していた凛々しい少女ではなかった。

「それでも、なるべく早いほうがいいでしょう？」

「ん〜〜、そらそうやなぁ……さすがなのはちゃん、優秀や……」

はやての声からは疲労困憊の様子が強く、ぐったりとデスクにうつぶせになるはやてからは今にも寝言混じりのいびきが聞こえてきそうだった。

（はやてちゃんは頑張りすぎだよ）

腕を枕代わりにして頬をつきながら、利き手だけは端末を素早く動かし、ゆっくりと垂れ下がっていくまぶたをそれでも何とか懸命に起こそうとするはやては、いつの間にかものすごい怪訝な正直見ていて怖い表情を浮かべていた。

おそらく本人は気がついていないだろうなと、自分も端末を操作する手をゆるめずにはやてを見るなのはは思いながら、さて、どうすれば彼女にゆっくりと休んでもらえるだろうかとマルチタスクの一端を立ち上げながら複数の思考とともにそれを考察する。

「ねえ、はやてちゃん。少し休んだら？　効率悪いよ？」

いろいろ悩んで言葉を選んだ結果、なのはは割と当たり障りのない言葉を発した。

「あ〜。ん〜、まあ、ええやん」

はやては特に反論するわけでもなく、というよりもなのはの言葉は当たり障りが無いどころか全くの正論であったため反論できずにただぼんやりとした意識のままぼんやりと会話をはぐらかすように手をひらひらとふった。

（手強いなぁ）

なのははしばし端末から手を離し、マルチタスクの一端ではなく数割を使って、この上司をどう説得して休憩させるか考え始めた。
はやての様子を見れば、既に寝入るまで後何秒というカウントダウンが始まっているようにも思えたが、八神はやて執務官の補佐官としての矜持がそれを許せそうにもなかった。補佐官の役割は執務官の仕事をただ補助するだけでなくて、如何に執務官がストレス無く効率よく仕事を捌けるか常に腐心しておくのも大切な仕事だとなのははやての補佐官になる直後にエイミィ・リミエッタから聞かされている。
今のはやての様子から見れば、どう考えても一度仮眠をした方がトータルとしての仕事の効率が上がることは間違いなく、今の状態では仕事が思うように進まない以上につまらないミスを連発してしまう危険性も明らかにある状態だ。

いっそのこと、耳元で子守歌でも聴かせてしまおうかとなのはは思うが、フェイトほど歌の上手くない自分では逆に雑音になってはやての眠りを妨害してしまいかねないとも思った。

（レイジングハートがいてくれれば、音楽でも流してもらえるんだけどなぁ）

なのははそう思いつつ自身の胸元に目を落とすが、年齢の割に貧相な自身の胸元には今はあのおしゃべりな紅い石は無い。なのはのデバイスであり相棒のレイジングハート・エクセリオンは先ほどの任務が終了したあと、定期メンテのためにとこの艦の民間協力者であるアリシア・T・ハラオウンと技術主任であるマリエル・アテンザによって拉致されてしまっていた。
あるいはレイジングハートやアリシア、リンディのような話術があれば、音楽などに頼らず自力ではやてを休ませることも出来ただ

ろうが、残念ながらなのはには彼女たちのような悪魔のごとき達者な口撃を展開させることは出来ない。
　かつてアリシアの展開する絶妙な話術から苦悩と失敗、後悔のきっかけをもらった者としてなのははやはり、アリシアのあり方にはある一種の反感を持ってしまう。それによって必要な悩みをもらったことに感謝するべきだと言うことは理性で分かっていても、やはりいまだアリシアに対する微妙な感情がある。

（アリシアちゃんがあんなことを言わなかったら、私は迷うことなんて無かったのに……）

　なのははまた、五年前のあの事件のことを思い出す。自分たちの幼なじみ達の全員に多大な影響を与えた闇の書事件。

（そっか、もう五年もたったんだ）

　思えば五年も過ぎていた。まだ五年しか経っていないと言うべきなのか。なのはにとってその長くも短い間に起こったことは未だトラウマのように頭にこびりついて離れない。おそらく幼なじみを始め、あの事件に関わった多くの人たちにとってもまだ越えられない大きな壁としてあの事件は存在するのだろうとなのはは思う。

――　ただ一人、アリシアを除いて　――

「うーん……むにゃむにゃ……Ｚｚｚ……」

　間の抜けた寝息が思案の海に沈みかけたなのはの意識を呼び覚ました。見るとはやては両腕をデスクに投げ出し、額をべったりと机上に擦りつけるピクピクと動かしながらまるでスイッチの切れた自動人形のような様子で眠りこけている。

「また、失敗しちゃった」

どうして自分はこういうことに関しては要領が悪いのだろうかとなのはは思いながら、ため息をつきゆっくりと立ち上がった。

（本当は仮眠室に運ぶのが一番なんだろうけど……）

運動神経が完全に切れていた幼少の頃と違い、なのはも今になってはある程度の体力がついたとはいえ、魔法で筋力を強化したとしてもはやてを目覚めさせずに部屋の隅の扉の向こうに続いている仮眠室まで運ぶことは出来ないだろう。

「お休み、はやてちゃん。八神執務官」

その代わり、なのはは仮眠室から洗い立ての柔らかい毛布を持ってきて、ムニャムニャと口元をもぞもぞとさせながら眠るはやての肩にそっとかけた。全自動のランドリーで洗濯された毛布は、地球の太陽の光を浴びた毛布に比べればどこか手触りが硬く、幾分か手に感じる重さもずっしりしているように思えた。

それを聞いた同乗のアリシアは「昔の船に比べれば天国だよ」と、知りもしない時代のことを切々と説いていたが、やはりなのはにとってこの人工の光しか存在しない閉ざされた時空間の海の中は本質的に人が生きる場所ではないのではないかと思うようになっていた。

（だけど、私は生きてられるんだよね）

しかし、そんな艦橋の中自分たちはこうして息をしていられる。アースラという巨大な殻をまとい、人工的な光と人工的な重力に満たされ、空気も水も循環させることによって自分たちはここでこう

して生きていられる。私たちは矛盾の中で息をして動いている。
なのはは、毛布を抱きしめブツブツとどこか幸せそうに家族の名前を呟きながら眠りこけるはやてに目をやりホッと一息つくと同時に暖かな笑みを浮かべた。

「いい夢を、ね」

後でリインフォースあたりを迎えにこさせようとなのはは思いながら仕事に使う個人端末をテーブルから拾い上げ、執務室の照明を落として外に出た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

何年行き来しても何一つ代わり映えのしないアースラの通路は、流石に初めてここに来たとき比べれば随分くたびれているように思えた。この艦の艦長であるクロノ・ハラオウンは「くたびれたんじゃなくて、年季が入ってきたと言え」とことあるごとに口にしている。しかし、今年度に入って管理局が次世代艦として建造に着手したザンシ・ヴェロニカ級時空航行艦の完成と同時にこの艦はお払い箱にされると聞けば、先ほど歩いてきた廊下のくたびれた印象はこの艦が寂しがっている証なのだろうかとなのはは思う。

あるいは、目に映る光景は自身の心想の鏡か。

なのはは人のいない閑散としたラウンジで一人お茶を傾けながら、外を映し出す巨大な高強度樹脂製の窓に目をやり、短く息を切った。

アースラが航行している時空間の海には凪が広がっている。時空

間の海は見た目こそたいした変化は無いが、凪いでいる時もあれば大時化の時もある。ミッドチルダには”時空間の海は世界を映す鏡”という古い言葉がある。もっとも大きな時化は次元災害によって引き起こされる次元震であり、それが少ない凪いだ海であればその分世界は平穏であろうということだった。

なのはは地上の海よりも静かで変化に乏しく、見ていてもおもしろみのない海を眺めることがいつの間にか好きになっていた。地上の海よりも、天上の海より、それらすべてを包み込みどこまでも広くあまねく広がっていってけっして人の手で触れることの出来ないこの海をなのはいつの間にか好むようになってた。

「”静かな海は世界の平穏を示す”か……いい言葉だね」

何となく呆然と海を眺めながら思索に沈もうとしていたなのはの背中にそんな朗らかで幼い声が舞い降りる。なのはは一瞬びくりと肩を震わせ、驚きのまま素早く背後に目を向けた。

《詩的な表現ほどアリシア嬢に似合わないものはありませんね》

機械じみた割には妙に人間味のあふれる皮肉を呈する声とともに、振り向いたなのはの目には紐に通された赤い石を首にかける幼い金髪の少女が映し出された。

「や、なのは。今は休憩？」

まるでその姿はなのはにとって幼馴染みの幼少の頃を見ているように思えた。紅い瞳に肩口でまとめられた短い金色の髪がラウンジの柔らかな照明に輝き、彼女の活発な性格をよく演出している。

「こんにちは、アリシアちゃん。レイジングハートのメンテは終わったの？」

いきなり背後から声をかけられたにもかかわらず、何ら取り乱すことなく割と平然とした様子で受け答えをするなのはに、声の主アリシア・Ｔ・ハラオウンは少しつまらなさそうに肩をすくめ、カフェオレの入ったコーヒーを片手になのはの対面の席に腰を下ろした。

「メンテよりもご機嫌取りの方が大変だったよ。最近あんまり過激なことをさせられてなかったみたいだから、システム自体はすごくきれいだったし。ノープロブレムってやつだね」

からからと笑うアリシアに得意げに光をピコピコ点滅させるレイジングハートを見て、なのははすこしだけ苦笑を浮かべざるを得なかった。レイジングハートが絶好調である。それは当たり前だ、なぜならなのはは、この五年間、一度もレイジングハートを戦闘には使っていないのだから。

《いや、それにしてもアテンザ主任もなかなか手際が良くなってきました。あれならいずれ私のメンテナンスを一任してもよろしいかと存じます》

人間で言えばおそらくふんぞり返ってとか猛々しくとか傍若無人という言葉がよく似合うような口ぶりでレイジングハートがアリシアの胸元で偉そうにチカチカと輝いた。

「レイジングハートが人のことをほめるなんて、珍しいどころの話じゃないね。マリーが聞いたら涙流して喜ぶよ？　きっと」

アリシアもアリシアでまさかこの莫迦みたいに気位の高いデバイ

スが自分やマスターであるなのは、家族であるユーノ以外の人間を認める発言をするとは思いもよらず、素直に驚きの声を上げた。

「えーっと、アリシアちゃん。レイジングハートって、そんなに？」

「うん。だって、母さまが起こした事件の時、クロノが結構泣かされてたっていうから」

「そうだったんだ、知らなかった……だって、ユーノ君が整備してたときは大人しかったでしょ？」

《ユーノとはつきあいが長いですからね。当たり前です》

レイジングハートの様子を見て、なのはは確かに納得することが出来た。確かに、マリエルが今までどれほど血の滲むような思いをしてレイジングハートと付き合ってきたのか。気むずかしいどころか、まるで古代ベルカの暴君の如く振る舞うレイジングハートに認められることがどれほど難しいことだったのか、なのはには分からないが、ともかくその分の煮え湯を飲まされ続けてきたマリエルに対しては頭を下げるしかないと思った。

（整備室には足を向けて寝られないなぁ）

モンスターペアレンツ、モンスターペイシェントといった新人種のことは最近よく取りざたされるようになったが、レイジングハートのようなモンスターデバイスというカテゴリーは未だかつて無いのではないかとなのはは思ってしまった。

「それにしても、海だけじゃなくて、今日はここも随分静かだね」

何時の間にお代わりを注文していたのか、アリシアは新しいカフェオレに砂糖とミルクをドバドバ入れながらふと呟いた。

そう言えば、となのはもそれに賛同しながら周りを見回す。しかし、自分たちは休憩しているが、今の時間帯ならオフシフトまでまだまだ随分時間が残されている。なのはが今ここにいるのは、寝入ってしまった上司に配慮して仕事の場所を移してきただけのことで、休憩をしに来た訳ではない。

「アリシアちゃんはもうお仕事終わったの？」

なのはの言葉に、アリシアは「ん？」と彼女に視線を戻した。この艦の前艦長が愛飲していた”りんでぃ・すぺしゃる”に勝るとも劣らない砂糖味のカフェオレを美味そうに飲むアリシアになのはは少し苦笑いを浮かべながら、「はてさて」と小首をかしげるアリシアの言葉を待つ。

「マリーはリインのメンテにかかりっきりだし、キハイル先生は次のホーネットの設計にお熱だし……そう言えば、はやてに何か頼まれてたような……何だったかな？」

「それを忘れてちゃダメだと思うよ」

「ん～～」

腕を胸の前で組みながら額に手を当てるという独特の姿勢を取りながらアリシアは深く思いだそうとした。

―ＰｉＰｉ―

アースラのラウンジで悩める少女の肖像を実在させるアリシアの懐からそんな乾いた電子音が響いた。

「ん？　リインだ……アリシアだよ。何かあった？」

アリシアは懐から小型の通信機を取り出して、それがまだマリエルから任務後点検の最中であるはずのユニオンデバイスからだと分かると、少し怪訝な表情をして通信機のスイッチを入れた。

なのはから見て怪訝な表情というのは、おそらく彼女はリインフォースのメンテナンスに何か問題が起きたのではないかと考えているのだろうとなのはは予想しているからで、実際のところアリシアははせっかくの休憩時間に呼び出す無粋にすこしだけ機嫌が悪くなっているだけのことだ。

『アリシア嬢ですか？　今どちらに？』

アリシアとなのはの間に投影されたモニターに映る長い銀髪でキリッと結ばれた長い眉毛は応にこの世のものではない美しさを示す。

彼女自体それほど感情を表に出すことをしないために、氷のような美しさという言葉がよく似合うとなのはは実感し、すこしだけため息をついた。

「ラウンジでなのはと飲んでるよ？」

アリシアは砂糖がたっぷりと入ったすぺしゃるカフェオレを掲げながら机に肘をついて頬を手のひらにのせる。

『私の記憶（メモリー）によりますと、ラウンジではアルコールの類は出さないはずでしたが』

「うん、だからお茶してる」

『そうですか……ところで、先ほど本局の無限書庫からアリシア嬢当てにメールが入っているのですが、何か心当たりはありませんか？』

「無限書庫？　なんて？」

無限書庫。その言葉を聞いてなのはは膝の上の手を握りしめた。それは余りにも過剰な反応で、なのはの感情の機微に気がついたのは未だアリシアの首にかけられたレイジングハートだけだった。

『何でも請求された資料がそろったので、配達すればいいのか取りに来るのか決めてくれとのことです』

「資料……ああ！　そうだった！　はやてに頼まれてラデオン遺跡の資料を作らないといけないんだった！！」

まるで喉に刺さった小骨が抜けたといわんばかりにアリシアは声を上げ、少し乱暴にマグカップを机に置いた。

《そんな大切なことを忘れていたとは。アホですねアリシア嬢は》

レイジングハートはアリシアの胸元でそんな彼女の余りにも子供っぽい仕草にあきれたように紅い光をチカチカさせて苦言を労した。

その瞬間、アリシアの腕は握りしめられそれは空気を切る音を残して振り切られた。よく見れば、彼女の手の中にはレイジングハートが握りしめられ、開かれた手のひらからひとつまみ程度の紅い石が確かにテーブルに向かって放たれたことを対面のなのはしっかりと目にしていた。

「わわっ！！」

カツンという軽快な音をたてて跳ね返り空に舞うレイジングハートをなのはは手を掲げで何とか頭上を越えて遙か彼方へ転げ去ってしまう前に受け取ることに成功した。

思わず降り出した手の中にしっかりと我が相棒が握りしめられていることを確認し、なのはは「ふう」と安堵のため息をつき、すぐさま眉間に若干のしわを寄せて、その目はぎらりと光りレイジングハートを睨みおろした。

「今のはレイジングハートが悪いよ」

例え、それが真実でも他人をアホなどと悪し様に罵るようなことはするべきではない。正直このデバイスは誰の影響でこうなってしまったのか。責任者を出せといいたくなるような思いでなのはは レイジングハートの石の表面を指先でペシッと叩いて叱り付けた。

《日に日にアリシア嬢の仕打ちがバイオレンスになっていきます。これは一体どうしたものでしょうか》

しかし当の本人であるレイジングハートは主の言葉を聞いているのか聞いていないのか、アリシアに対する暴言を謝るどころか自分自身の境遇を歎き始める有様だった。

アリシアは「これはもうどうしようもないね」と言いたげに肩をすくめ、首を軽く左右に振って「ハンッ」と下品な鼻息を漏らした。

「日に日に口の滑りが良くなるデバイスが淑やかになれば、その問題は解決すること間違い無しだね」

レイジングハートがお淑やかになる。なにをどう考えてもそれはあり得ないとなのはは心の中で一瞬で結論づけてしまった。レイジングハート自身も、淑やかで奥ゆかしい自分自身というものを全く予測することが出来なかったのか、どこか悔しそうな様子で光を明滅させ押し黙ってしまう。

「それじゃあ、私は無限書庫に行ってくるけど、何か伝言とかある？」

まるで勝利の美酒を味わうように、アリシアはいやみったらい極上の笑顔を浮かべながら立ち上がり、ふとなのはの方に目を向けた。

「……無理しないで、身体には気をつけてって」

何に伝言か。それは聞く必要のないことだった。なのはは面を振ってうつむき、ただいつも変わらずいっていることを反芻するように繰り返しアリシアに伝えることしかできない。ただ、それがどうしようもない本心であることはアリシアには身にしみるほど理解でき、彼女もまたそんななのはに対してうなずくことしかできなかった。

「……分かった、確かに伝えておくよ」

立ち去るアリシアの背中を見つめながら、なのははそれ以上掘り下げるようなことを言わないアリシアにどこか感謝の念を覚えながらも、そうして何の気兼ねもなく自然体で彼の元へ行くことが出来る彼女を理不尽にも嫉妬していた。

《直接伝えた方が宜しかったのではないですか？》

そして、この言葉も決まり切った言葉だった。決まり切っているが、レイジングハートにとって不合理以外の何者でもないにもかかわらずこう聞かざるを得なかった。

「いいんだ。ユーノ君とは、いつでも会えるから」

いつでも会えるというその言葉にレイジングハートは虚構を感じた。

《そう言ってユーノと会う機会など、最近になって減る一方ではありませんか》

常になのはとともにあるレイジングハートをだますことは出来ない。例え、互いに忙しいといっても彼はまだなのはと同じ街に住み、学舎が異なり交流が薄にせよ同じ学校に通っているのだ。理由さえ用いることが出来れば、それこそ毎日会うことだって出来る。しかし、彼女はそうしていない。まるで、彼のことを避けるような生活をずっと送っているとレイジングハートは正確に記録している。何故かということをレイジングハートは情報として知っている。しかし、自らの感情を害してまでそれを行い続ける主の意志をレイジングハートは理解することが出来ない。それは、自身がデバイスであるから人の心を知ることが出来ないだけなのか、それともなのはの心情を正確に知ることは誰にも出来ないのか。レイジングハートには判断のつかないことだった。

「答えがね、見つからないんだ……いつまで経っても、同じ所をぐるぐると回り巡るだけ。一緒に歩けない。隣で守れない。それだったら、私がいる意味なんて無いじゃない……それだけだよ、レイジングハート」

ユーノは空から降りて書庫に入った。彼はもう既に魔導師としての生涯を終えてしまっている。その二つがぐるぐるとなのはの脳裏を巡り、ただ自分は遅すぎたのだと自覚することしかできない。そこから前に進むことが出来ない。既に終わってしまったことを掘り返すにはあまりにも時間が経ちすぎた。

《そうですか……》

あの後悔を繰り返したくない。彼に繰り返させない。ただそれを願い、なのははあの日から生きる。そのためにどうすればいいのか、何度も何度も悩み考え、結局全てが遅く、彼は自分の意志と足で未来へ向かって歩き続けてきた。書庫に入った彼はもうあの時のように命の危険にさらされることは少ないだろう。彼が翼を捨て、力を失ったことは、彼の無事を思うなのはにとって良いこととしてもいいはずだった。

しかし、それでは満たされない自分がいることをなのはは確かに自覚していた。

(結局私は、時間を取り戻したいだけなんだ。プレシアさんのようにあの時の自分に戻りたいだけなんだ)

心が壊れていく感じがする。心臓にヒビが入り、そこから真っ赤な血が流れ出して、次第に体中が冷えていくような感触がなのはに襲いかかる。

なのははズキリと痛む胸を押さえ込むように握りしめ、声を上げずただ耐え続けた。

助けを求めることは出来ない。

なぜなら、助けを求めれば必ず彼が現れるだろうから。
だから、自分は声を上げずに苦しまなければならない。
なのははただひたすらこみ上げる嗚咽に耐え、その姿を知るものはその胸元で強くその両掌に握りしめられる紅の石ただ一つだけだった。

第二話　Without you……

海原から吹き付ける風は夜の到来を予感させる冷涼さに染められ、吹き抜けていく風に流れる髪や服の裾を押さえながら、なのはは何も言葉を発さずただ一人真っ赤に染まる空に目をとらわれていた。

一人で居るのは寂しくて辛い。幼少の頃に味わった一人の時間を思い出し、なのはは奥底から湧き上がる感情に口を押さえたくなる。しかし、そんな寂しさの中でも一人で居られる安らぎをどこか感じてしまっているのは、自分もまた変わってしまったと言うことだろうかと彼女は思った。

あの頃は望まず一人で居させられた。しかし今は自ら望んでこうしている。少なくとも、こうなるように自分は歩いてきた。

上手くやれているはずだとなのはは思っていた。この寂しさも満たされない気持ちも、友人達と一緒にいれば表に出ることはない。だから、今まで誰にもこの感情を覚られていないと思っていた。はやてとアリシアを除いて。

しかし、昼休みの屋上、昼食をつつきつつアリサに言われた言葉がずっとなのはの頭から離れない。

「暗い、かぁ。アリサちゃんには叶わないなぁ……」

ポツリと呟いたなのはの言葉は風に流されて背後に佇む山並みへと消えていく。消えていけとなのはは願った。この言葉は残しておきたくないと彼女は思う。

昼食時、まだ肌寒いこの時期では人の少ない屋上でアリサは小さな弁当をつつくフォークでなのはを指し示し、『今更だけど、あん

た、暗いわよ』と口にした。
それはまるで問答無用の言葉で、なのはには反論を許さない口ぶりだった。

彼女は言いにくいことを堂々と口にしてくれる。あの時も誰にも何も伝えずに一人で抱え込んでいたなのはを初めて問いただしたのもアリサだった。得がたい友人だとなのははしみじみと思う。しかし、それでもやすやすとそれを口にすることは出来ない。反論を許されない自分に出来ることは、ただ、表情に張り付いてしまったかのような乾いた笑みを返すこと以外に無かった。

（嫌われちゃったかな）

それはないとなのはは何故か確信することが出来る。アリサの隣に座るすずかもアリサと同様話を聞きたい様子だったが、結局何も話せない自分にただただ悲しそうな表情を浮かべるばかりだった。失望されたわけではない。しかし、そんなことを思う自分にむしろ失望してしまいそうになってしまう。

（何も不安なんて無いのに）

夕日が海原に沈もうとして、おそらくなのはの背後にはその真っ赤な光に照らしつけられた低い山々の群れを伺うことが出来るだろう。山と海に囲まれた海鳴の街は紅い光に照らされながら夜を迎える。海鳴海浜公園の柵の向こう側に広がる真っ赤な海原はただただ雄大で、自分自身というものが本当にちっぽけに思えてしまう。こんなちっぽけな自分が何を思ったとしても、世界は何も変わらないんだろうなとなのはは思いながら、ならばどうして自分はここにいるのだろうかという、どうしようもない疑問が湧き上がってくる。

「なのは？」

背中に声が触れた。それはとても暖かで、いつまでも感じていたい、そしてどうしようもなく逃げ出したくなる声だった。ゾクリとなのはは背筋に悪寒を感じた。

今の自分をみて欲しくないとなのはは思った。それでもなのはは その声に振り向かないわけにはいかず、ゆるゆると恐る恐ると踵を返し彼を視界に捕らえた。

「やっぱりなのはだ。どうしたの？　こんなところで」

神様はいつだって与えて欲しい物を与えてくれず、与えて欲しくない物を与えてくれるものだ。アリシアが冗談交じりに呟いた言葉が真実に思えるほど、なのははこの邂逅を怨み、そして同時に祝福した。会えて嬉しいと思った。会いたくなかったとも思った。

穏やかな笑みを浮かべながら軽く手を掲げ、ゆっくりとなのはの方に歩いてくる男性。薄手のワイシャツにスラックスという凡庸な出で立ちでそこに立っていたのは、最近になってすらりと背が伸びたユーノだった。

「ユーノ……君？」

幼い頃は殆ど変わらない背丈だった彼は今となっては少し見上げないとその表情を伺うことが出来ない。その表情には理知的な眼鏡に包まれ、見る者をただそれだけで落ち着かせてしまうと思うほどに静かで暖かな笑みが浮かべられていた。

「私もいるよ」

その声になのはは目を向けた。夕日にその長い金髪を輝かせ、同

姓のなのはでさえ思わず見とれてしまうほど美しい少女、フェイトはそのままユーノの側まで歩み寄りなのはと向き合う。

「フェイトちゃんも……えっと、その……こんばんは……」

思いがけず出会ってしまった二人になのはは困惑を覚えた。どうして今ここで出会ってしまうのだろうかとなのはは思った。そして、ユーノの側に当たり前のように寄りそうフェイトの姿に少し胸が痛む。

今日ははやてと同様、二人は学校を休んで管理局の方に行っていたはずだ。ユーノは無限書庫の呼び出しに応じて、フェイトは教導隊入隊の為の高度戦術技能研修のために。そんな二人が連れ添ってどうしてこんな所にいるのかと、なのはは疑問に思うがそれを聞き出すことが出来なかった。

「こんばんは、なのは。なんだか久しぶりだね」

久しぶりといっても最後に顔を合わせてからまだ数日程度しか立っていない。その程度会久しぶりといわれてもなのははピンと来なかったが、その数日程度でさえ久しぶりと思えるほど彼女の研修は内容の濃いものだったのだろうか。

「まあともかく……お帰りなさい、フェイトちゃん、ユーノ君。なんだか、こんな所で会うのも珍しいね」

なのははそう言いながら横目でふと海をみた。思えばここはいくつもの思いでのある場所だった。新しい出会いと今では親友となった彼女とぶつかり合い、別れを経験し、ただ助けたい一心で巨大な敵に打ち勝った場所。フェイトもユーノもそれを思い出したのか、少しの間、感傷の混じった眼で海を眺めた。

「僕もフェイトもさっき帰ってきたばかりなんだけど、家に誰もいないのを忘れてて、夕飯も用意されてなかったんだ」

そう言えば、となのはも昨日からしばらくの間クロノとリンディは本局に出突っ張りになると聞いていたことを思い出した。おそらくユーノもフェイトもそれを知らされていたはずだが、おそらく仕事が終わったことで緊張感が切れ、すっかりと忘れてしまっていたのだろう。

「うん。食べられるものも姉さんのカップ麺とかしかなくて。せっかくだからどこかに食べに行こうかって話になったんだ」

「勝手に食べるとアリシアは怒るからね。あんまり帰ってこないくせに」

ユーノとフェイトはお互いに肩をすくめた。アリシアが地球のハラオウン邸にいないのは、ほとんどデフォルメとも言えるようなものだった。それはアリシアがアースラ専属の民間協力者として忙しい毎日をおくっているというだけではなく、単純にアリシアにとって太陽のない本局やアースラの方が居心地がいいというのがその最たる理由となる。

「それで外に出たら夕日がすごく綺麗だったから」

「まあ、それでふらふらとここまで歩いて来ちゃったってこと」

「そうだったんだ。私も似た感じかな？　なんだか、すごい偶然だね」

なのははそう言って少しだけ嘘を吐いた。本当は、人のいない所に行きたかった。他人のノイズの混じらない所で、人知れず色々と考えたかった。あまり意味のある行動ではなかったが。

「うん。最初に会えて嬉しいよ、なのは」

フェイトはそう言ってほんわかとした暖かい笑みを浮かべた。

二年前を境にしてフェイトはよく笑うようになった。かつては透き通った陶器の人形のような儚げで危うさを感じさせるような美しい笑みを浮かべていた彼女だったが、今の彼女が浮かべているものは年相応の朗らかな少女そのものの笑みのようになのはは感じられる。

彼の隣で自然に笑っていられる。ただそれだけでなのはの胸に突き刺すような痛みが走る。

「えっと、外で食べるんだったら、うちで食べていったら？　お母さんに話せば、サービスとかしてくれると思うし」

一瞬身体を包み込んだように感じられた暗雲をなのはは振り払い、何気ないふうを何とか装って二人を交互に眺めた。

「えっと、どうしよう、義兄さん」

「んー、いいんじゃないかな。元々翠屋に行こうかなって思ってたし」

翠屋は喫茶店ではあるが、夕暮れ時には軽い食事も出している。桃子の本分である洋菓子に比べるとそれらは幾分かレベルは落ちるが、その飾らない素朴さは客からも慕われている。

ユーノはチラリとなのはの表情を伺った。彼女の表情には何の影も見あたらない。夕日の逆光に当てられて、ほんの少し彼女の姿がはっきりと見えにくくなってはいるが、少なくとも一見しただけではなのははいつも通りに見えた。しかし、奥深くに何か危うい気配が見え隠れしているように思えてならなかった。

なのはが抱えている悩み、それが一体どのようなものか。何が原因なのか、確証はないがそれはおそらく自分に関することなのだろうと推測できる。話をするチャンスなのかもしれないとユーノは思った。

「それだったらお言葉に甘えようかな。ね？　義兄さん」

フェイトは果たしてこの思惑に気がついているだろうかとユーノは思うが、横目で見たフェイトの表情には何か確固たる意志のようなものを感じられて安心を覚えた。

大丈夫、フェイトも自分と思いは同じだとユーノは確信した。

「うん、なのはも一緒にどうかな？」

「私も？」

「あ、いいね。三人で食事だ。楽しそう」

ユーノの提案にすぐさまフェイトは賛成する。ユーノの意図は分かる。ユーノはいつでもどこでもなのはのことを思いやっている。彼の全ての行動がなのはに繋がるのではないかと思えるほど、彼はなのはのことを心配しているのだ。それを毎日見せられる義妹のフェイトとしてはなにやら複雑な気持ちになってしまうが、なのはを思いやるのはフェイトも同じことだ。

あの事件からずっとすれ違い気味だった自分たち。いつの間にか妙な距離感を感じてしまう自分たちの関係を問い直したい。

「うん、そうだね。私も一緒してもいいかな？」

今日は一人でいたいとなのはは思っていた。しかし、断れば二人に不審に思われる。今のなのはにとって恋人のように仲のいいこの兄妹の側にいることは辛かった。とどまりたくてとどまれなかった場所にフェイトが居る。それを思うだけで心がささくれ立つ。なのははその感情を何とかして押し殺しながら二人に肯いた。まるでその顔は泣いているように見えた。おそらくこれはもう、時間が解決してくれるものではないだろう、あるいは今までそれを期待していた自分たちに対する罰なのかと二人は思う。

「じゃあ、行こう？」

なのはは二人を先導するように歩き出す。並んで歩くことはない。それは今の自分にはその資格はないとなのはは感じている故だった。背後から聞こえてくる二つの足音。つがいの鳥の羽音のように寄り添って奏でられるリズムが否応なくなのはの耳に響いてくる。

昔の自分はどうやって彼と彼女の間に立って歩いていたのだろうか、今の自分は果たしてその間に入ることが出来るだろうか。おそらく、二人は今でも自分を拒まないだろうとなのはは思う。そうであって欲しいとも思った。だが、受け入れられれば、きっと自分はそれに甘えてしまうだろう。そこに留まろうとしてまた自分を見失ってしまうだろう。それはなのはの確信だった。

失いたくない、故に離れてしまう。矛盾している自分の生きかたを直視したくなくて、なのはは歩調を強めた。

三人は一緒に歩く。言葉無く歩く。果たして自分たちは今でも繋

がっていられているのだろうかと思い。かつての絆はまだ残されているのだろうかと思いながら、紡がれた言葉はなにもなかった。

＊＊＊＊

一体今自分は何をしているのだろうか。なのははそんなことをボンヤリと思いながら横たわるベッドの枕に顔を埋めた。

翠屋に到着した三人は桃子からの温かい歓迎を受け、ユーノとフェイトは彼女と士郎から一緒に夕食を取らないかと誘われた。二人は翠屋で食事を取るつもりだったので面食らっていたが、高町夫妻の少々強引な誘いに甘えることとなった。

楽しい食事だった。少なくとも表情の上ではそれを保つことは出来たはずだとなのはは思い、それでさえもおそらく母と父、姉には気付かれているだろうと確信する。だから、父と母は二人をいささか無理矢理食事に誘ったのだろう。

（心配、かけてるよね……）

なのはは申し訳なさに胸が痛む思いだった。

そんな感情に沈み込むなのはを部屋のドアがノックされる音に気が付き、うつぶせになったまま顔をその音の方に向けた。

誰だろうとなのはは首を捻った。母の桃子と父の士郎は夕食後もまだ喫茶店で仕事があり、兄の恭也と姉の美由希は道場で鍛錬をしているはずだった。

「なのは、居る？」

「ユーノ君！？」

ガバッとなのはは上体を起こし、そのままバランスを崩してしまってベッドから転げ落ちそうになる。

「大丈夫？　何かすごい音がしたけど」

何とか床に手を着いて転がり落ちてしまうのを防いだなのはは、ヒリヒリする手のひらをさすりながら立ち上がり、

「大丈夫。ちょっとつまづいただけだから」

といって寝乱れた服の裾と髪を直しつつ部屋の中をぐるっと見回した。

特に散らかっていないことを確認するとなのはは居住まいを正し、声に出ない程度に咳払いをした。

「入っていいよ」

その言葉は随分と自然に出すことが出来た。

「うん、失礼します」

そんな声とともにドアのノブがガチャリと音立てて回され、蝶番がこすれる音が少しだけ部屋の中に響く。スプリングのない扉は何の障りもなく開かれていき、訪ねてきた少年の姿を徐々に徐々にあらわにさせていく。

「いらっしゃい、ユーノ君。どうしたの？　フェイトちゃんと一緒に帰ったと思ってた」

ひょっとしたら、居間でテレビを見ているレイジングハートに付き合っていたのかもしれないとなのはは思い浮かべる。

レイジングハートは既に高町家の家族の一員となっている。なのはが学校に行っている間は家の中を自立飛行してテレビを見たり、時々忍び込んでくる猫の相手をしたり、美由希の部屋の本を読んだり、恭也がいれば一緒に盆栽の様子を見たりしているのだ。家族も最初はそれに驚いていたが、そんな生活が一年も続けば、桃子がうっかりと夕食にレイジングハートの分まで用意してしまったほど慣れてしまった。

「ちょっとレイジングハートの話に付き合ってたらこんな時間になっちゃってね、黙って帰るのも何だから」

わざわざ挨拶に来てくれたと言うことなのだろうかとなのはは思い浮かべた。

「そうなんだ。レイジングハートは？」

彼を話に付き合わせていた当のレイジングハートはどうしたのだろうかとなのははそっとユーノの首筋から胸元を覗き込んだ。そこにはあの特徴的だがデザインとしては平凡な赤い石はいない。

「まだ下でテレビみてるよ。今日は国営放送で好きな歌手がテレビに出るんだって張り切ってた」

レイジングハートが好きな歌手といえばと、なのはは最近よくテ

レビに顔を出すようになった、フェイトとアリシアに似た声の歌手を思い出した。芸能に疎いなのはでさえ彼女の名前を知っているぐらい、彼女は有名になりつつあるとことあるごとにレイジングハートは宣伝してくるのだ。

「私、時々レイジングハートのことが分からなくなるよ」

レイジングハートがデバイスであることは間違いない。しかし、桃子が勘違いしたことと同様になのはも時々レイジングハートがデバイスであることを忘れてしまう。余りにも人間味にあふれ、文化的なものに対する理解に富み、盆栽という趣味さえ持ち合わせるレイジングハートは他のデバイスに比べても明らかに異質だ。

「僕も時々ね。だけど、リインフォースとかみてるとそう言うのもありかなって思うよ」

ユーノはそう言うと、開けられた扉の枠に背中を預けた。座ってしまうとそのまま居着いてしまい更に帰るタイミングを逃してしまうのだろう。

「そうだね……」

なのはとユーノはそのまま少し沈黙した。お互いに世間話をしながら切っ掛けが欲しいと感じていた。ユーノは鼻がしらをかきながらなのはは表情をチラチラと伺う。なのははそうしてみられるのが少しくすぐったいようなもどかしいような感覚を受けて、自分の部屋でありながら居心地が悪くなる。

「……」

しかし、なのははユーノを待った。

「……ねえ、なのは」

ユーノは扉の枠から背中を離ししっかりとなのはの目を見た。

「なぁに、ユーノ君」

「もしも、もしも何か悩みがあるんだったら、頼って欲しいんだ。一人で抱えないでほしい」

「……」

なのははユーノから視線を離し、俯いて目を閉じた。気付かれていることは分かっていた。それで黙っていてくれると言うことも分かっていた。

そして、なのはは確信する。

（ユーノ君には……私が何に悩んでるかとか、全部分かっちゃうんだろうな……）

少しずるいとなのはは思ってしまう。彼はいつもそうして自分を見守ってくれているとなのはは改めて実感することが出来た。

――縋り付きたくなる――

どうしようもない欲求が脳裏に浮かび上がる。それを受け入れることが出来れば、決定的な一言を告げてしまえばどれほど楽になれ

るか。しかし、なのははその思いを打ち払うように少しだけ目を閉じ、そして開いた。

「うん、ありがとうユーノ君。もしも悩みが出来たら、その時は相談するよ。大丈夫、心配しないで。私は、今とても充実してるから」

だから、なのはは嘘を吐いた。負担をかけるわけにはいかない。自分が彼の負担になるわけにはいかない。今ここで彼に全てをゆだねてしまったら、おそらく自分はそれに溺れてしまうだろうとなのはは確信する。

それほどなのはにとってユーノの側とは安らぎのある場所だった。

「そう……なのはが言うんなら、そうなんだろうね……」

ユーノの悲しみに満ちた表情になのはは薄い笑みを崩してしまいそうになる。

「私は大丈夫だよ。うん、大丈夫。学校は楽しいし、お仕事も充実してるし、家族も……」

「なのは」

言いつのろうとするなのはをユーノは遮った。静かな言葉になのはは言葉を飲み込む。こうして真剣な表情で見つめられ、そして名前を呼ばれてしまえば、なのはは言葉を繋げることが出来なくなる。

「僕は、なのはに助けられた。だけどね、僕はそんなこと関係なくなのはの助けになりたいんだ。恩返しとか、そう言うことじゃなくて。僕は……」

その言葉に飲み込まれると思った。

「それで……」

飲み込まれまいとしてなのははギュッと身体を硬くさせ、意識に冷たい感情を流し込んだ。

「え？」

「それで、またユーノ君は傷つくの？　あの時みたいに……」

それは言いたくない言葉だった。

「それは……」

これを言えばおそらく自分は彼をもう一度縛り付けることになるだろうとという予感があった。

「ずっと忘れられないんだ。私は確かにユーノ君に守ってもらった。だけど、それだけだったんだ。私はいつも守ってもらってばっかりで、何も出来なかったんだ」

「そんなこと、無い！」

「うん、ユーノ君ならそう言ってくれるって分かってた。ユーノ君は優しいから、絶対に否定してくれるって分かってた」

「当たり前だよ。なのはが何も出来なかったなんて、そんなことあるわけない」

「それが正しいって、分かってるんだよ。だけど、駄目なの。私は納得できなかった。だから、これは私が自分で解決しなくちゃいけないんだ」

「やっぱり、大丈夫じゃないんじゃないか。なのはは、嘘吐きだ」

「ごめんね、ユーノ君。だけど、今頼るわけにはいかないの。今、縋り付いちゃったら、私は駄目になっちゃう。だから、もう少しだけ待ってて……お願いだから……」

縛り付けるかもしれない。しかし、言い終わってなのははどこか心の枷が一つだけ無くなったようにも感じていた。その枷はおそらく大きさを変えて目前に佇む彼の心を縛るのだろうと確信も出来る。

「……、……分かったよ。だけど、これだけは約束して。もしも、どうしようもなくなったら、はやてがそう判断したら僕じゃなくてもいい、誰かに相談して欲しい」

彼はなぜ、こんな言葉を聞きながらどこか安心した表情を浮かべているのだろうか。

それは、良きにせよ悪きにせよなのはの本音をかいま見ることが出来たからであるが、なのはにはそれを知ることが出来なかった。

「……その時が来たら……」

なのはは語尾を濁し、ＹＥＳともＮＯともとれない答えを返す。

「僕は、なのはを信じる。じゃあ、今日は帰るよ」

「うん、また明日」

明日会えるかどうかは分からない。それでも次に会うときはしっかりと笑顔を浮かべていたいとなのはは願った。

ユーノはその言葉に安心したような笑みを浮かべ、そのまま扉を閉めて部屋を出た。

ドア越しにユーノが階段を下り、そしてしばらくして玄関が開き閉じられる音がしてユーノは帰路についたようだった。

今、窓から外を見れば薄暗い夜道を歩く彼の後ろ姿が見えるだろう。ひょっとすれば門の前に立ってこちらを眺め上げているかもしれない。

しかし、なのはは閉じられたカーテンを終ぞ開くことが出来なかった。

ユーノが去った部屋の中をただ一人眺め回して、なのはは机におかれたバスケットを見つける。

なのはは無言でバスケットを持ち上げた。

ふとよぎる彼が立ち去るときに浮かべていた表情。複雑な感情が浮かんでいた。拒絶された悲しみと、理解できない安心感。

(私は、またユーノ君の自由を奪っちゃったんだ)

なのははそっと取り上げたバスケットを腕に抱きしめた。

「ごめんなさい……」

かつて彼が寝床としていたバスケットは何も答えない。誰にも届かない言葉を、ただなのはは何度も何度も吐き出し続けた。

第三話　Pride of the Fool（前書き）

愚者の矜持

第三話　Pride of the Fool

ボンヤリとした温もりが、しだいに広がって身体を包み込む感触がなのはを緩やかな眠りから引き起こそうとしていた。

「ん、ん～～？」

鳥の鳴く声は既にない。微睡みにあるなのはの耳に届くのはそよ風が窓を叩く音に家の側を通り過ぎる車の音。そして、階下から響く落ち着いた家族の声だけだった。

「……何時かな？」

なのははそう言いながら布団の中からもぞもぞと片手を出して、枕元のあるはずの携帯電話に手を伸ばす。まだアラームは鳴っていない。夢うつつになのははそう思いつつ、ようやく探し当てた携帯電話を布団の中に引き込み、その表示窓に示された数字をゆっくりと目で追った。

「いつも通りだね……」

まだ二度寝できそうな時間だった。少なくともアラームが鳴るまではゆっくりと布団の中にいられそうだ。しかし、今の季節で二度寝してしまえば、おそらく次はどれほどけたたましくアラームが鳴り響いていたとしても気付くことなく時間が過ぎるだろう。

「はぅ……」

二度寝への強烈な誘惑を何とか振り払い、なのははもぞもぞと上

体を引き起こしながら、今にも睡魔という接着剤で付着させられそうになる目蓋を腕でごしごしと擦りつつ、ようやくベッドに腰を下ろすことが出来た。

「ふぁぁぁぁ」

腕を思い切り伸ばし、メロンでも一口に出来そうなほどの大口を開けてなのははようやく一息ついた。机上の紅い宝玉は、そんな淑女としてあるまじき振る舞いをする主をモニターしながら、少し呆れたように表面を明滅させる。

「……ふぅ……おはよう、レイジングハート」

《おはようございます、マスター。昨晩はお楽しみでしたね？》

先ほどのなのはの振る舞いを皮肉るつもりなのか、レイジングハートは明るい緑色の布の敷かれた蜂蜜色のシェルケースに修まりながら、淑女に対する言葉としては聊か具合の悪い朝の挨拶を投げた。

「訳の分からないこと言わないで。そんな相手もいないってば」

《それはそれで寂しいことです》

「もう、放っておいてよ」

幼い頃のなのはであれば、レイジングハートの発言にただ、『お楽しみって何？』と小首をかしげ、その意味する所を知れば顔を真っ赤にして両手を振り回していただろう。しかし、今のなのはに取っては、その程度のことは朝の挨拶程度のことになってしまった。

むしろ起き抜けのぼやけた頭にはレイジングハートとのやり取り

はいい目覚ましになる。ある意味、それがレイジングハートなりに気の利いたアラームなのかとも思ってしまうが、長いつきあいのあるなのはにはそれは違うと断定できた。

基本的にレイジングハートにとって自分が面白ければ良いのだ。

《それにしても、朝に強くなりましたね。以前のマスターであれば、私のアラームがなければ起きられなかったというのに》

ベッドから降りて固まった身体をほぐすなのはに、レイジングハートはどことなくつまらなさそうな口調で話しかけた。

「嘘言わないで、レイジングハートのアラームなんて二度と聞きたくないよ」

しかし、なのはにしてみれば、いかにも昔を懐かしむようなしみじみとした声で過去をねつ造されてはたまらない。幼い頃に聞いた、最初で最後のレイジングハートのアラームは秘かになのはにとってトラウマとなっている。幼心にピー音だらけの卑猥な言葉を起き抜けに垂れ流しにされては、思い出そうとしただけで全身に鳥肌たってしまいそうになる。

しかし、確かにレイジングハートの言うとおり、小学生だった頃と比べ、随分朝に強くなったとなのはは思った。それは、一時期行っていた早朝の魔法の練習のお蔭であることは明確だった。その習慣をやめてしまって随分たつ、朝に弱くなくなったことだけが今に続も続いている。

なのははふと思った。あの頃の自分はどうしてあそこまで精力的に訓練をしていたのかと。

あの頃は、今よりも随分早く起きて、ユーノに付き合ってもらいながら眠い目蓋を擦りつつ魔法の練習をしていたものだ。今となっては懐かしさしか感じない、輝かしいと思える時がそこにはあった。

今でも魔法の訓練は毎日欠かすことはない。それは、必要であるからだ。いくら、戦闘を主体にしない執務官補佐の仕事であっても、万が一という時は必ず訪れる。

しかし、あの頃のように四六時中魔力負荷かけながら、学校でも勉強等をマルチタスクの隅っこに追いやってまで、ひたすらイメージによる戦闘訓練を続けるようなことはしていない。むしろ、あの時の自分は、なぜそこまでする必要があったのか。あの頃の自分は何を目的に戦う為の技術を磨いていたのか。

なのはは「ふぅ」と愁いを含んだ息を一つついた。

（たぶん、何も分かってなかったんだろうな……）

魔法はスポーツとは違う。魔法は力だ。その力を用いれば、誰かを救うことが出来、あるいは奪うことも出来る。それは、その時の心のありように依っていくらでも変化し、たとえ正しいことに使おうと考え続けていてもその縁さえ巡ってくれば人をも殺す。気軽に扱っていいものではない。

武器を持って戦う仕事を担う幼なじみ達が、時々、どうしようもないほど痛ましい表情で自らの手を眺めていることがある。それは、守りたいと思って守れなかった人たちに対する後悔なのか。あるいは、血に染まった自らの手を見つめ直していたのか。なのはにはそれを聞き出す勇気はなく、ただ一人アリシアを除いては誰にもそんなことは出来ないだろう。

しかし、彼等に起こっている現実は自分にもあり得たかもしれない事実だ。いや、これからも、ともすればありうるかもしれない事

実だと、なのはは実感する時がある。
誰かを助けたい助けになりたいと思いながら、自分が持つ力がその逆のことを容易に引き出すことが出来るものだと気が付いたあの時、守るどころか逆に傷つける結果になってしまったあの時、思い出すことは五年前のことだけだった。

「私は、どうしたらいいんだろう」

なのははそう呟きながら思考を打ち切った。これ以上考えても何もならないことは既に分かっている。それも二年も前から既に分かっていることだった。

なのはは気持ちを落ち着け、切り替える為に少しだけ深く息継ぎをし、横目でチラリと時計を確かめてからゆっくりとパジャマのズボンを下ろし、上着のボタンを外し始めた。

「ちょっと寒いや」

いくら過ごしやすい季節とはいえ、オレンジの下着以外に剥き出しの素肌には朝の空気は若干冷たく感じた。

なのはは少しこわばる二の腕をこすりながら壁につり下げられた制服をハンガーから外し、聖祥中学指定の白いワイシャツに袖を通し、薄手のジャケットを上から羽織り、小学校の制服に比べれば随分と短いプリーツ・スカートを腰まで引き上げホックを留めた。
正面に立つ大きめの姿見の中にたたずむ自分自身は、小学生だった頃の自分に比べれば随分と落ち着いた様子を見せる。それは、単に身にまとっている制服の色彩がグレーという落ち着いたものだからなのか、それとも自分自身が大人になってしまったという現れなのか。変わらないのは、頭の両サイドから伸びる緑色の髪紐でくく

られた二本のお下げのみ。それも、随分と長くなってしまって、今ではツインテールと呼ばれる髪型に近くなりつつある。

《マスター》

普段この時間なら、今日のテレビ番組のスケジュールを確認するためほとんど会話のないはずのなのはの相棒、レイジングハートが珍しくなのはに声をかけた。

「ん、なに？　レイジングハート？」

なのはは、勉強机に設けてあるレイジングハートに目を向けた。

《リインフォースのマスターより通信が入っております》

「はやてちゃんから？　なんだろう？」

《繋いでもかまわないでしょうか》

「うん、お願い」

なのははそう答え、少し居住まいを正した。念話でも携帯電話でもない通信をするということは、はやては今地球にはいない。それらではなくよりセキュリティーの高いデバイス間通信にするということは、何らかの任務の話なのかもしれない。

なのはは少しだけ緊張を覚えながら、セキュリティー通信に切り替わるモニターを注視し待った。

『……やっと繋がった。もしもし？　聞こえてる？』

ノイズ混じりの画面がようやく具体的な像を映し出し、時折モニターにねじれた横線がよぎりながら、空中に投影されたモニターにショートカットの少女、八神はやてが映し出された。
こうやってしっかりと顔を向き合わせているのに、もしもしと言ってしまうのは日本人の奇妙な癖なのだろうかとなのはは思いながら答えを返した。

「聞こえてるよ、はやてちゃん。おはよう。どうしたの、こんな時間に」

通信機の向こうにいるはやては執務官の黒い制服を身に纏い、何となくやつれた表情で椅子に座っている。
おそらくそこはアースラにあるはやての執務室なのだろうとなのはは予測し、その背後に立つリインフォースにも軽く会釈をした。
彼女も無言でなのはに対して軽く頭を下げ挨拶の代わりとする。

『ごめんな、準備中に』

徹夜をしたのだろうか。幾ばくかやつれた表情や、どこか抑揚のない彼女の声になのはは疑問が浮き上がってくる。

(徹夜するぐらいなら呼んでくれればいいのに)

なのはそんなことを思いながらも、今はそれを口にせず話を促すことにした。

「それは、いいけど、要件は？　あまり、時間がないんでしょう？」

いつもより若干ながらノイズレベルが高いモニターの様子からは、これが随分と急造仕上げのセキュリティー回線であることを類推す

ることが出来る。そして、そんな重要な通信をこんな時間に寄越すと言うことは、相当せっぱ詰まった用事であることはなのはにも直ぐに分かった。

「詳しい話をしてる暇はないんよ。悪いんやけど、今すぐアースラに来てもらえんか？」

「急な話だね、緊急事態？」

「詳しい話はあとや。今、レイジングハートに私の名前で招集の為の命令書と緊急渡航許可証を送っておいたから、確認して」

すぐさまなのはは勉強机の上に目を向ける。レイジングハートは気を利かして、何も言わず、その書類を通信とは別のモニターに映し出した。

そこには、確かに夜天の王、八神はやての署名が入ったデジタル書面がある。夜天の王の名前、しかもこの書類の作成日時がつい数分前と言うことになのははその退っ引きならない事情を理解することができた。

いくら、お調子者で面白いことが好きなこの幼なじみでも、アリシアとは違い悪戯のためにここまで面倒なことはしないはずだ。

「命令受理しました。これより高町執務官補佐は可及的速やかにアースラに向かいます」

なのはは直立し背筋を伸ばし、はやてに対して敬礼を行った。夜天の王の勅命であれば、最敬礼を行うべきなのだろうが、今は略式に止める。

「頼んだで」

はやては略式よりもラフに手を掲げるとそのままモニターを閉じてしまった。無駄な会話をしている暇もないのだろう。何かしらの任務なら、これから彼女はその準備を行わなければならないのだから。

「急がなきゃ……」

親しい友人に対して他人行儀な敬語と敬礼をおくることにまだまだ慣れないと感じながら、なのはは足もとの通学鞄を取り上げて、椅子に置き、その代わりにシェルケースより自分で浮き上がってきたレイジングハートに手を捧げた。レイジングハートはちょうど上手い具合になのはの手のひらに降り立ち、まるでそれを自慢するように一度キラリと光った。

《さて、緊急任務ですか。今日は恭也と将棋を指す約束をしていたのですが、キャンセルせざるを得ないようですね》

レイジングハートは今日見る予定のテレビ番組のスケジュールを全てクリアにし、恭也の携帯電話に約束のキャンセルを詫びた文面のメールを送りながら、システムを待機状態から臨戦状態にシフトさせつつ紅い表面を明滅させた。

「うん、急なことだけどよろしく……っていうか、お兄ちゃんとそんな約束してたの？」

レイジングハートが何かと兄の恭也と、盆栽や剣術観賞を始めとした趣味が合うことは知っていたが、まさか自分の知らないことでそんなことをするほどだったとはなのはには想像も付かなかった。

それにしても、将棋盤を挟んで兄とこの石ころが向かい合って駒

を動かしている情景を想像して、その余りにもシュールな想像図に笑うことさえも出来ない。

《マスターが学校に行かれている間は暇ですので》

「はぁ……仲いいよね、お兄ちゃんとレイジングハートって」

なにやらどっと疲れたとなのはは思う。もしも兄とこの石ころが想像図通りの様子で将棋を指しているのであれば、極力近所からは見えないようにやってもらいたいものだと切に思った。

《堅物に見えてなかなかユーモラスな方ですからね。それよりも、今回はライオットと言うことになるのでしょうか？》

「分からないよ、詳しい話は聞いてないから。だけど、そうなるかもしれない」

普段なら、はやての任務において戦闘を担うのは彼女の騎士達だ。しかし、ヴィータとシグナムは本式にははやてと所属が違う。この緊急にあの二人を呼び戻せるのかどうか、実に微妙な所だとなのはは判断した。ともすれば、自分にも戦闘が回ってくるかもしれない。出来ることなら、それは避けたいとなのはは思った。

《なるほど、腕が鳴りますね》

ようやく本来戦闘用に作られたデバイスの本領が発揮できるとばかりにレイジングハートは一際強く光を発して答えた。

「鳴らせるものなら鳴らしてみてよ」

なのははそんなレイジングハートの発言に呆れるように言うが、その実は戦うことに何の疑問も持つことのない彼女を少しばかり羨ましく思う。迷わずに生きていられるのが、どれほど幸せなことか。

《……マスターはこの頃アリシア嬢の影響を受けすぎていると愚考します》

「……うるさいなぁ、少しは静かにしてよ」

言われてみれば、今のは正にアリシアとレイジングハートの交流の仕方そのものだとなのはは気が付き、ぶっきらぼうながらも恥ずかしさに頬を染めた。

《Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ》

ヤレヤレと言わんばかりにレイジングハートは表面を明滅させ、そのままるで機械のように口を閉ざしてしまう。

「レイジングハートはずるい」

都合良く人間と機械とを使い分けないで欲しいとなのはは思うが、今はそういうレイジングハートのドライさをありがたいとも感じていた。

なのはは言葉を発しなくなったレイジングハートを手早く首に回し、深呼吸をひとつして、「よし、頑張ろう」と両手で自分の頬を叩いた。

そして、なのははレイジングハートから垂れ下がった紐を首に回し、両手には何も持たずに部屋を出た。長丁場になるかもしれないが、ある程度の着替えや生活品はアースラにもおいているので問題はないはずだ。

後ろ手で扉を閉めて廊下を走り、短いスカートの裾を気にすることなくドタドタと勢いよく階段を駆け下りた。

「どうした？　なのは、危ないぞ」

まるで飛び降りるような勢いで階段を下りるなのはに、リビングに入ろうとしていた父、士郎が注意を促した。階段を下りる勢いそのままで玄関まで走っていこうとしたなのはは突然呼び止められて転びそうになってしまうが、何とか踏みとどまって、少し呆れたような表情の父に目を向けた。

「あ、お父さん。ごめんなさい。ちょっと、用事が出来て急いでて……」

「もしかすると、管理局か？」

「うん、はやてちゃんから」

「そうか、頑張ってきなさい。学校には母さんから連絡してもらうから」

「ありがとう、お父さん」

なのはが出て行った後、閉ざされた扉を士郎はただじっと見守っていた。

士郎の目から見て、なのはの表情には何の陰りもなかった。自ら進んではやての呼び出しに応じて、自分で選んで任務に向かった。彼にはそう見えた。

しかし、それが本当なのかどうか士郎には判断できない。たとえ

娘が自ら選んで任務に赴くとしても、親としてそれを許すべきなのかどうか。こんなことで良く「頑張れ」などと言えたものだ、と士郎は自嘲した。

「今日も止められなかったわね」

背中から響く声に士郎は振り向いた。そこには濡れた手をエプロンの前掛けで拭いながら、どこか寂しそうに目を向ける妻の桃子が立っていた。

「そうだな」

士郎はそう答え、桃子の肩を抱いた。

「やっぱり、心配か？」

「あたりまえよ、士郎さん」

桃子としては、フェイトが任務中に生死の境をさまよったときに、なのはにはこの仕事について欲しくないとも考えていた。ひょっとすれば、あのベッドに眠っていたのはなのはだったのかもしれないと気付いた後、あそこにいたのがなのはじゃなくて良かったと思ってしまったのだ。親としては当たり前の感情なのかもしれない。しかし、あの日以来、そんな感情を抱いてしまった自分に対する罪悪感、嫌悪感をぬぐえずにいる。

そして、あの事件の後、なのはが魔導師に復帰すると聞かされて桃子は娘の正気を疑ってしまった。たとえ嘱託魔導師としての復帰に過ぎないといっても、それで危険がないとは桃子には思えなかった。どうして、自分からそんな危険な場所へ行こうとするのか、桃

子には理解できなかった。
しかし、自分自身の中にある一種の後ろめたさから、今でもなのはに行くなと強く言えずにいる。
「なのはは今必死になって前を向こうとしているんだ」
士郎の言葉は、桃子に伝えるものと言うよりは自分自身に言い聞かせているもののように感じられた。ひょっとすれば、士郎もまた自分と同様に何らかの罪悪感を抱えているのかもしれないと桃子は感じる。
「ええ」
しかし、桃子も士郎も何も言わない。それは、自分自身の中だけで止めておくべきだと何故か思えるのだ。
「危険も分かっているはずだ。ユーノ君にフェイトちゃんのことあるから。それでもなのはは先に進むためにあの道を選んだんだ」
寂しいと桃子は思った。それは、子供が自立していくために親の手元から離れることについての寂しさなのか、まだまだ子供であるにもかかわらず、苦しみと迷いの世界に生きなければならないなのはの生き方に対する悲しみなのか。
なのはの思うとおりにさせるべきか、それとも、大人であり親である自分たちがもっと導いてやるべきだったのか。
どちらにせよ、もう遅いのかもしれないと桃子は思った。
「そうよね、士郎さん。あの子が選んだことなんですから、応援しないといけないんですよね……」

それすらも逃避になるのではないか。自分は果たしてなのはと正面から向き合えているのか。桃子はそんなことを思いながら士郎とともにリビングへと引き返した。

あの子に支えになる人がいればいい。全てを受け入れて守ってくれる人が出来ればいい。そう、願わずにいられなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なのははハラオウン邸に向かって走り続ける。中学校になって、小学校のときの慢性的な運動音痴は多少は改善されたものの、やはり知り合いの中では一番自分が運動神経の繋がりが悪い。

（やっぱり、もっと鍛えないと駄目かな）

徐々に激しくなってくる鼓動と頻度の上がる吐息になのははそんなことを思いながらただひたすら走った。

そして、１ｋｍも離れていないはずのハラオウン邸に着いたときにはなのは、腰を折り膝に手を突いて呼吸を整えなければならないほどの疲労を経験していた。いくら運動音痴でも、これは酷いなとなのはは思いながら、震える手を持ち上げながら頭より少し高い所に位置するインターフォンを押し込み、暫く待った。

「はーい」

ドアの向こうから軽快なブザーの音が響くと同時に、とてもよく通る女性の声が届き、しばらくも待たないうちにドアの鍵が開けられる。誰が訪ねてきたのか確かめずに鍵を開くのは無防備すぎるの

ではないかとなのはは思うが、扉が開かれた先にいた彼女を見れば、そんな考えも消えてしまった。

「お、おは、よう、フェイトちゃん」

前屈みのままで片手を挙げて息も絶え絶えに挨拶するなのはの目前には、なのはとおそろいの制服を着たフェイトが少し驚いた様子でそれを見おろしていた。幼い頃でさえ、すれ違えばつい振り向いてしまうほど綺麗だった彼女は、成長するに従ってそれがどんどん洗練されていき、今では親友でさえともすれば一瞬物怖じしてしまうほど美い。

「ど、どうしたの、なのは。こんな時間に……ユーノを向かえに来た、とか？」

フェイトはとても意外な訪問に面食らう。今まで、学校に行くときは通学路の途中で合流するのが普通で、なのはがハラオウン邸に向かえに来ると言うことはなかった。

ついでにフェイトはチラリと誕生日にユーノから贈られた腕時計を確認するがまだ十分朝食を取るだけの時間がある。

「そ、そうじゃなくて……えっと、アースラに行かなくちゃ、いけなく、なって……」

どうやらフェイトははやてから呼び出しを受けていないようだ、この様子ならユーノもかなと思いながら、なのはは一生懸命息を整えながら、出てきたリンディに挨拶をする。

リンディは、デフォルメされた猫が可愛らしく刺繍されたエプロンをしていた。なのははそれを見て、一瞬だけ年甲斐もないと思っ

てしまったが、考えてみればフェイトと年の離れた姉のようにしか見えない若若しいリンディにはそれが非常によく似合っていて、なにやら奇妙な感情が湧き上がってきそうだった。おそらく朝食の準備をしていたのだろう。リンディが現れた扉の向こうからは食欲を誘う良い匂いが漂ってきていた。

「おはようございます、リンディさん」

なのはは込み上がってくる腹の虫を気力で押さえ込み、少し乱れた衣服を直しながらぺこりと小さく頭を下げた。

「おはよう、なのはさん。ご苦労様ね」

リンディの優しい笑顔に、なのはの緊張が少しだけ和らぐ。笑顔は若さの秘訣なのだろうか。少なくとも笑顔は見る者の警戒心を和らげ、会話や交渉を上手く進めやすい者ではある。アリシアもまたそう言った笑みを浮かべるのが得意だった。

「いいえ、おじゃましてもいいですか？」

どうでもいい考えばかりが浮かんでは消えていき、なのはは仕切り直すように姿勢を正した。

「話は聞いているわ。急ぎなさい」

リンディはそう言って、廊下の先にある鍵のついた頑丈そうな扉に目を向ける。海鳴の一般的なマンションの中では明らかに浮いているその扉は、どこか硬質で冷たい印象を受ける。メルヘンではない別の世界への扉というのはあるいはこういうものかと思わせるような、飾り気のない無骨さを醸し出していた。

何度見ても好きになれそうにない、となのはは思った

「ありがとうございます」

なのははリンディに敬礼をおくり、その部屋へ向かう。海鳴からアースラに向かうにはハラオウン家に設置されている転送機か、八神家に設置されている転送機を使用する以外に方法がない。

「任務なんだね」

まだ少しよろよろとするなのはの肩を支えながら、フェイトはそっとなのはに聞く。

「うん、いきなりはやてちゃんから呼び出されて」

やはり、フェイトは呼び出されていないようだとなのはは知り、ここまでの緊急事態になぜ、彼女が呼び出されていないのか、なのはは少し疑問に思う。単純に戦力が必要なのであれば、現場から遠のいて久しい自分よりも、航空戦技教導隊に入隊することが決まっているフェイトの方がよっぽど相応しい。

「どんな任務？」

「それが……はやてちゃんも急いでたみたいで、まだ詳しく聞いてないんだ。かなり急いでるみたいで……」

「そうなんだ、私も行こうか？」

それは、フェイトの優しさなのだろう。フェイトは、親しい人が失われることを病的なほど恐れる。過去に失いかけた姉の影響が今

だ色濃く残っている。彼女が帰ってきて以来、それは随分と軽減されているように見えても、幼少期の多感な時期に決定されたその特質は無くなる様子はなかった。いや、あの事故によってそれは悪化していたのかもしれない。ある意味今はそれが元に戻っただけなのかもしれない。

「ありがとう、フェイトちゃん。また、一緒にお仕事できるといいね」

だから、なのはもそれを否定しない。なのはもまた、元の立ち位置に戻ることを切実に願っていることは間違いない。たとえ、失われた過去が戻らないと理解していても、どうしようもなく求めてしまう。そんな自分をどう定義していいのか分からないまま、なのははこうして異世界へと旅立つ。

玄関口より幾ばくも離れていない扉の前にたどり着き、なのははフェイトから離れた。転送室を閉ざす重厚な扉は、ミッドチルダの技術にしては珍しい手動の扉だった。なのははその取っ手の上部に備えられたプレートにレイジングハートをかざし、扉のロックを解除させた。

「なのは」

ガチャリと言う超高強度合金製のかんぬきが外れる音とともに、なのはの背を見守るフェイトがかすかに呟いた。

「ん？　なに？　フェイトちゃん」

「私が言えたことじゃないけど、無茶はしないで」

「うん、じゃあ、行ってきます」

鍵の外れた扉に手を当て、なのはは手を振るフェイトに軽く手を振りかえしながら、扉を開いた。

重厚な扉は幾分か重く、なのははそのまま振り向くように中に身を滑り込ませ、今だこちらを見るフェイトに対して肯きながら笑みを浮かべ扉を閉じた。

「……今回は、会えなかったな」

閉ざされた扉はそのまま自動的にロックがかかり、重いかんぬきの音が響いた後には部屋の中には静寂が戻る、はずだった。

「誰に会いたかったんだい、なのはは」

なのははその声に驚き、あわてて背後に身体を向けた。軽やかに回る身体に少し遅れてなびく髪は僅かになのはの視界を覆う。昨日はあのような別れ方をしてしまったことに対する後ろめたさになのはは顔を合わせたくないと思いながらも、会いたいと願ってしまう人の声。

「やあ、おはようなのは」

薄暗い照明に浮かび上がる灰色の壁面と無骨な転送装置の側。彼はその操作パネルに手を置きながら、実に気軽に手を掲げてなのはに声を贈った。

「ユーノ君、どうして？」

転送装置を起動させるには割と面倒な手順が必要となる。それは、

むやみやたらと世界間を移動させないための手段で、なのはが見る上では転送装置は既に起動して待機状態にあるようだった。つまり、なのはが家を出てハラオウン邸にやってくるまでに、ユーノは既にここにいて待っていたということになる。

フェイトも知らなかったことをユーノが知っている。

「いきなりはやてから連絡があってね。大至急なのはを転送してくれって」

その理由は単純明快だった。なのはを呼び出した人物ならユーノをあらかじめここにいさせることも出来たということだ。はやてが何を持ってユーノに頼んだのか。なのははそれがよく分かり、お節介な幼馴染みに対して若干の恨み言を言いたくなると同時に、抱きしめたくもなった。

「だけど、ユーノ君は……」

しかし、ユーノにとって魔法がどのようなものか。既にユーノは魔導師ではない。彼のリンカーコアは、数年前に起こった撃墜事件の際に既に臨界越えている。その原因を作り出したものがいったい何なのかと考えれば、なのははとうていここに彼がいることを承伏することなど出来なかった。

しかし、ユーノは笑っていた。とても暖かい笑みを浮かべていた。彼の身体からわき上がる不安定でバランスの悪い魔力が渦を巻いて部屋に満ち、なのははその光に包み込まれる。

吐息の一部には自分の魔力が混ざり、部屋に満ちる空気の中にはユーノの魔力が宿る。

吸い込む空気は、自分の魔力と彼の魔力が交じり合い、そしてそれは肺を通じてリンカーコアにもたらされる。生み出される活力には彼の命すらも息吹いている。これが応にリンカーコアの由来。魔

導師達が空気を通して繋がりあう為の中心が身体の中で脈動しているのだ。

「行って、なのは。今の僕でもこれくらいのことは出来るから」

なのははその言葉に少しドキリとする。それはまるで、フェイトを助ける為に嵐の海へ誘われた時の再来のように思えた。あの時は肩を並べともに嵐に立ち向かっていった、しかし、今回は見送られる側になっている。もう、自分たちは肩を並べることが出来ないのかとなのはは思った。

「うん、ありがとう、ユーノ君。……ごめんなさい……」

ユーノはなのはの詫びの言葉を聞かないふりをして転送機に転送魔法を流し込む。瞬間的にわき上がる翠の光に包まれ、なのはは一瞬俯いた面を上げてユーノと目を合わせた。光ははじけ、二人は視線を合わせたまま互いの視界から相手が消えるまでただ沈黙して別れを告げた。

「行ってらっしゃい、なのは」

はじけた光が空気に消えて、ユーノは「ふぅ」と一息ついて、異世界へと旅だった彼女のために言葉を贈る。その言葉は届くことはないが、ユーノはただそれに無事な旅路と帰還の願いを込めた。

ユーノは転送室の内側の鍵を開き、中に何も置き去りにされていないことを一目で確認してから外に出た。

「はぁ……」

転送室から出たユーノは、大粒の汗を出しながら胸に手を当て、重い扉に背を預けるように崩れ去る。ズキズキと込みあがってくる胸の痛みは、去っていった彼女の無事を案ずる感情と酷使されたリンカーコアの疼きがない交ぜとなって、とても心地が悪いと感じられる。

しかし、この疼きも痛みもひとえに彼女のために出来た証であると思えば、ユーノには何の不満もない。そして同時にこれが彼女の負担になっていることも知っていた。

「結局、僕は分かっててこうしてしまうんだ」

しかし、ユーノは彼女の心を守れなかった。他にどうすればいいのか、彼には分からない。

「義兄さんは、無理をしすぎだよ」

ユーノは義妹の声に面を上げた。どうやら、待たせていたらしいとユーノは知り、どこかばつの悪そうな表情を浮かべることしかできない。痛みを伴うフェイトの声。自分はこの義妹を護ることが出来ているのだろうかとユーノは思いながら、表情には笑みを浮かべ、胸を押さえながらゆっくりと立ち上がった。

「無理が出来るうちに無理をしておきたいんだ」

いつまで魔力を扱うことが出来るのか、それは医者でも分からないことだった。臨界状態に会うユーノのリンカーコアは、刻一刻と崩壊に向かっているわけではない。使わなければ悪化することはない。しかし、だからこそユーノは自分がどこまで出来るのか分からない。どこまで彼女をはじめとした皆のために自分の力を使えるのか、ただそれだけが問題だった。

「莫迦……ユーノ義兄さんは、莫迦だ」

フェイトはユーノの胸に拳を軽く当てて呟いた。どうして、この義兄はここまで自分のことをないがしろに出来るのか。それは自分も言えたことではないが、この義兄は特にひどいとフェイトは思う。

「そうだね、フェイトのいうとおりだ。でも、それでもなのはの為に何かできるんだったら、それでもいいよ」

真の愚か者は自分が愚かであることを自覚していながらその生き方を正すことが出来ない人間をいうのかもしれないとユーノはふと思った。『人は愚者として救われるべきである』という地球の偉人の言葉を思い出した。それでも自分には救いの道など無いのだろうとユーノは思う。

「義兄さんは、なのはのことばかりだね……本当に、なのはが羨ましいよ」

「なのはが特別に想ってるのは、僕だけじゃないだろう？」

「……そうだね、私もはやても、みんな、なのはのことが特別なんだね」

彼女が無事であればいい。いつか彼女の全てを受け入れ、支えになり、守ってることのできる人が表れればいい。二人はただそう願うことしかできなかった。

第四話　Briefing

まるで真っ暗な霧が晴れるように視界が広がっていき、気が付けばなのははハラオウン家の転送室と似たような設備が備えられた広い部屋に立っていた。背後からは機械を冷却するためのファンの低い音が絶えることなく聞こえる。随分と堅牢な印象を持つ四方の壁を少し注意して見れば、そこには魔法耐性のある結界が練り込まれているようだった。

なのははその実に見慣れた風景にホッと一息つき、次いで目の前に出現したコンソールモニターに目を向け、転送が問題なく完了したことを確認する。

『転送完了、氏名と登録コードを述べ、転送許可証を提示してください』

出現したモニターにはそのような内容の文字が浮かび上がり、次いで同じ文面を機械音声が告げてなのはにそれを促した。

たとえ、知り合いが多く搭乗してるアースラでもこういう手続きを省略することは出来ない。

なのはは自分の登録コードを思い出しながら、首にかけられたレイジングハートを手のひらの上に置いてモニターに向かって差し出した。

「高町なのは、登録コードはＥＳＢ０９７ＯＭ０７７ＡＬＥＯ０４３１５。レイジングハート、許可証をお願い」

登録コードはランダムな文字の羅列ではなく、そのコードでその本人の簡単なプロフィールを類推できるようになっている。そのた

め、その本人のことをある程度知っている人間なら、このコードをある程度類推できるようになるのだが、だからといってこの登録コードだけで出来ることなど小指の先ほどでしかない。

《ＹＥＳ》

レイジングハートは、なのはの目の前に先ほど発行された命令書と緊急渡航許可証を写しだした。

転送元が認識した許可証と転送先が認識した許可証が一致されることが確認されないと強制的に転送元に送還されてしまう。よっぽどのことがないとエラーは起きないが、許可を取った個人転送ならたまにエラーがあるらしい。特に今回は、ユーノによる高速転送を行ったので、下手をすればエラーが生じる可能性がある。ただし、その場合ははやてを呼んで何とかしてもらえばいいだけのことだが。

「コード認証、許可証の確認を完了しました。高町なのは執務官補佐と確認。ようこそ、アースラへ」

必要なものさえそろっていれば手続き自体にはそれほど時間はかからない。なのはは、完璧にシステム化されたそれにいつも感心を覚える。そして、手続きの完了を物語るように転送室の鍵が開かれ、重々しい扉が開かれた。

「さてと、急がないと……」

なのははそう呟き、任務の前にはたいてい集合することになっているブリーフィングルームの位置を頭の中に思い浮かべながら扉からアースラの中へと入っていった。

特にいつまでに集合せよとは言われていない。しかし、可及的速やかにというはやての命令を履行するためにはどれほど急いでも急

ぎすぎという事はない。少なくとも現在のアースラはまだ、時空間の海を航行中であるため、少なくともボーダーラインはクリアしているとなのはは判断している。

「ご苦労様です、なのは嬢」

転送室の扉をくぐりこのままの勢いで足早にブリーフィングルームへと向かおうとしていたなのはは、殆ど隣から響いてきた女性の声に二の足を踏み外すように少し体制を崩してしまった。

「わわっ！！」

まるで床の突起に足を取られたときのように上体だけが前に傾いていくなのはは、こんな時ばかりは自身の運動神経のなさに怨みを持った。

そう言えば、最近はデスクワークばかりで少し体重が増えてしまったとどうでもいいことさえも思い浮かべながら、なのはは近づいてくるだろう地面を直視したくなくて思わずかたく目を閉じる。

しかし、バランスを取ろうとして振り回した手がギリギリで何かを掴み取り、なのははどうにかしてその柔らかく冷たい取っ手に縋り付くように引き寄せることが出来た。

「申し訳ありません。驚かせてしまったようです」

その声、先ほどなのはを驚かせた声になのははゆっくりと閉じていた目を開いた。

酷く冷たいが小さくて柔らかいと感じた感触は、彼女が差し出した手の感触であり、自分はそれを必死になって両手で抱き寄せている。その声の主、リインフォースはその美しい表情を冷静に保った

まま、ただなのはの為すままに手のひらを預けていた。
成長したなのはよりもまだまだ背が高く、雪原のように白い長髪に夜の暁のような穏やかな紅の双眸を携える彼女は、管理局より支給された堅苦しい制服を完璧に着こなして立っていた。

「えっと、おはよう？」

何となく圧倒されている感覚をなのはは覚えた。

「はい、おはようございます。なのは嬢。随分お早いお着きですね」

彼女、リインフォースの仕草は全く自然で無理がない。端的に言えば、彼女は同姓であるなのはから見ても美しすぎた。フェイトのような未成熟な美しさではない。完璧な形で実現された一つの理想がそこにある。

「よかった、間に合ったんだ」

なのははそう言いながら、体勢を整え、恥ずかしそうにリインフォースの手をほどいた。

「ええ、まだ目的地まで４００時空距離ほどありますので、問題ない時間ではあります」

「到着までだいたい四時間ぐらいか……問題はないけど、ギリギリぐらいだね」

呼び出しの際にはやてが口にした、とにかく時間がないという言葉もそれで納得が出来るほどだ。なのはは、今回の任務の概要さえも全く伝えられていない。それはおそらくこの艦に集まっている者

達も同様だろう。

「ともかく、お待ちしておりました、なのは嬢、レイジングハート卿。主達がお待ちです」

「うん、分かったよ」

《はからいに感謝します》

なのはの頷きと、レイジングハートの答えを受け、リインフォースは少し足早に廊下を歩き出した。なのははその隣に並んで歩き、時折すれ違う乗組員（クルー）と簡単な挨拶を交わす。

その誰もが心なしか慌てた様子で、なのはの余りフォーマルに見えない制服に少しだけ目をやるだけで、それを指摘するものはいなかった。突然言い渡された任務に、誰もが余裕を失っていると言うことなのだろうとなのはは思い、その空気に余りにもそぐわない自身の服装を少し恥ずかしく思った。

『やっぱり、この格好だとこっちでは目立つね』

なのはは口に出すようなことではないと思い、念話でこっそりとレイジングハートに語りかけた。

『《確かに、その服装は幾分カジュアルに見えますね》』

レイジングハートも念話でなのはに言葉を返した。通常なら言葉を放つと同時に表面が光るのだが、今回はなのはに配慮してかレイジングハートも見た目は沈黙したままだった。

『《まあ、提督からはフォーマルらしく見える服装なら何でもいいと言われておりますし、問題は無いでしょう。実際、マスターには制服が支給されてませんから》』

レイジングハートの言うとおり、なのはは嘱託魔導師という正式な局員ではないので、管理局の制服は支給されておらず、服装に関してはカジュアルすぎなければ私服でも良いとされている。

実際、学校の制服は本来ならどこに出ても恥ずかしくないほどにフォーマルなものであるはずが、なのはの学園の制服はどちらかというとデザインを優先しているので、なかなかフォーマルに見られないのだ。

『《一度クロノ提督に相談してみてはいかがでしょうか？》』

『うーん、相談はしたんだけどね……』

レイジングハートの提案になのはは余り乗り気ではなかった。そうというのは、なのはは一度クロノに何か制服に見えるようなそれっぽい服を斡旋して貰えないかと聞いたことがあるのだ。しかし、そのときはクロノから「制服を着るということを甘く見るな」と怒られてしまった。クロノの言うことは全く正論で、そのときばかりは仕事をするということを甘く見すぎていたとなのはは思ったものだ。

『《あるいはクロノ提督に習い、マスターも常時バリアジャケットを着用してみればいかがでしょう。私に言いつけていただければそれなりのデザインを提供することも出来ますが？》』

『そうだなぁ……そんなに簡単に決めるべきじゃないと思うんだ。特に、今は……ね』

クロノは、待機中であっても常に黒衣のバリアジャケットを身につけている。それは、彼なりの業務に対するけじめなのかどうかなのはにはその真意を把握することは出来ないが、今の自分では彼のような思想をもってはいない。だから、自分がクロノのようにするのは、彼に対して失礼ではないのかと思ってしまうのだ。

レイジングハートは、人間とは何とも面倒な物だと判断しながら、音声を閉じた。

何となく話題が捌けて一人と一機は黙って廊下を歩く。そう言えばとなのはは、並んで歩くリインフォースを見上げた。

銀色に輝く長髪に、幼なじみの少女よりも深い赤色の瞳。それは、かつて初めて出会った頃と全く何も変わらない。それでもなのはは冷徹な印象しかなかった彼女も今となっては随分と感情豊かになったと思えた。

夜天の魔導書として何百年、あるいは１０００年近くの時を超えて、そして闇の書として改竄を受け、多くの破壊と破滅を生み出してきた。

彼女もやはり苦しかったのだろうかとなのはは思った。

しかし、隣を歩く彼女からはそんな苦しみを感じることは出来なかった。

彼女は苦しみを感じていなかったのか。それは違うと思える。そうでなければあの戦いの時、彼女は自らの行いに涙を流すことはなかっただろう。

彼女はその苦しみと悲しみからいかに解放されたのか。

なのははそれが知りたいと思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ブリーフィングルームに入ったリインフォースとなのはを見て、面々は一瞬口を閉じた。それをみて、なのはは何となく居心地が悪くなる。

「えっと、遅れてごめんって言えばいいのかな？」

そこに集合していた面々。艦長であるクロノ、アースラ専属の執務官であるはやてを筆頭に、はやての護衛官のエルンストに、夜天の騎士であるザフィーラとアースラの民間協力者アリシアは、少し小さくなったなのはに相好を崩した。

「いや、予想以上に早く来てくれて、むしろ驚くわ」

片手におにぎりを片手に緑茶を飲んでいたはやては、コトリと湯飲みをテーブルに置きながら目を擦った。

「ん～、呼び出してからまだ一時間経ってないよね？　何か、非合法な手段に訴えた？」

腕を枕のようにして机に寝そべっていたアリシアも顎を腕に乗せて小首をかしげた。

「いや、むしろ偽物である可能性も否定できない」

机の端にの方で背筋を伸ばして座っている男性、エルンスト・カーネルは明らかに怪訝な目をなのはの向けている。普段はあまりア

ースラを訪れない夜天の王の専属護衛官である彼にそのような目を向けられてはなのはとしてはとても居心地が悪くなってしまう。彼の視線は、そのくぐり抜けてきた修羅場の数に比例するように、睨まれれば蛙のように萎縮してしまいそうになるのだ。
本来なら同い年であるはずの彼にそんな感情を湧き上がらされるのは、なのはにしてみれば納得のいくものではない。

「……間違いなく本人だ」

アースラに入るにもかかわらず、今だ大型犬（狼）の姿で床に伏せるザフィーラだけが、ぶっきらぼうだが真実を告げていた。
人間ではない存在だけが真実を告げるとは、何か間違っているように思えるが、なのははそれもまたいつも通りの雰囲気だと思い少しだけ安心した。

「え～っと、意外と余裕あった？」

ここまでさんざんな物言いをされては怒ってしまってもいいのだろうが、それではますます連中を、とりわけはやてとアリシアを楽しませてしまう結果に成りかねなかったので、とりあえず色々なことを聞かなかったことにしてクロノに話を向けた。
クロノは面々の話題に乗らず、表面にでかでかと『黒野』とプリントされた湯飲みを机に置き、少し呆れたような溜息を吐いた。

「余裕はない。しかし、そう言うときこそ精神的に余裕を持つ方がいい。始めるぞ、なのはは早く席に着け」

「うん……じゃなくて……。了解しました」

なのははしっかりと敬礼をしてきびきびした足取りではやての正

面、アリシアの隣の席に着く。よく見ると、飲物を口にしていたのははやてやクロノだけでなく、アリシアを始めとして、ザフィーラを除く全員だったようだ。アリシアは隣になったよしみとばかりになのはにも桜色の湯飲みを差し出し、緑茶を注ぎ込んだ。

さしずめアリシアの湯飲みに入れられているのは、アースラの前艦長のお気に入りだった”りんでぃ・すぺしゃる”なのだろうとなのはは予想し、恐る恐る自分に継がれたお茶に口をつけてみる。

「……」

残念ながら二口目を飲む気にはなれなかった。

思わず口を押さえながら、同じくお茶を飲むはやてやクロノに目を向けるが、クロノは素知らぬ顔で視線をそらせ、はやてにいたっては悪戯が成功した子供のような、にやにやとした笑みを口許に浮かべている。

「さっさと始めた方がいい」

自分の護衛対象の余りにもあまりないたずらにエルンストは肩をすくめた。まだまだ子供であるアリシアならいざ知らず、そろそろ成人の年齢に入ろうかというはやてまでこのようなことをしていては、流石のエルンストであっても自分の身の振り方を考えたくなってしまう。

リインフォースははやての隣に直立して特に何も口に出さなかったが、その表情の機微が読めるものなら、後ではやては説教地獄に落とされるだろうと言うことは想像がついただろう。

「そうやね。みんなそろったことやし、始めよか」

口の中に残るネバネバとした砂糖の感触を、何度か唾を飲み込む

ことで解消させたなのはは、はやてのその言葉によってブリーフィングルームの空気が変わったことを理解した。さっきまで机をバンバンと叩いて馬鹿笑いをしていたアリシアも直ぐに姿勢を直して表情を研ぎ澄ませている。

「そう言えば、シグナムさんとヴィータちゃんに、シャマルさんもいないんだね」

全員そろったというはやての言葉があった。しかし、なのはが改めて部屋を見回してみると、そこにいるのは自分を含め僅か五人と一匹と一機。しかも、そのうちの一人であるクロノは艦長であり現場には出られない。また、アリシアも民間協力者である為、正式な作戦メンバーとしては数えられないはずだ。

本当にこのメンバーだけで作戦を遂行するというのだろうかと、なのはは探るようにはやての表情を伺った。

「シグナムとヴィータは空隊の任務で遠征中で、シャマルは災害救助にかり出されてて。流石に、呼び戻す時間があらへんかった。まあ、その代わりに今回はエルンストに来てもらったんやけど」

はやてはチラリとエルンストに目を向ける。エルンストはこくりと首を振るだけで、その表情には特に変化がない。

「閣下の命令に即応するのが俺の仕事だ。特に確認する必要もない」

「相変わらずだね、エルンスト君」

「……」

エルンストはなのはの言葉にこたえずに黙りを決めた。今は無駄

話をしている暇はないとその仕草は物語る。
なのはとしては何となく面白くない。エルンストはなのはと殆ど同い年であるにもかかわらず、彼はとてもそのようには見えない。それは、彼がたどってきた人生を物語るものだと思うが、そのことに関してはなのははおろか、はやてでさえも本人から詳しくは聞かされていないというのだ。

そんな彼が、どうしてはやての、つまり、夜天の王の専属護衛官を務めることになったのか、彼に関しては分からないことだらけだった。

「さてと、エルンストもお冠のようやし、そろそろ始めよか？」

はやては若干疲れた様子で席から立ち上がり、正面の大きなモニターに映像を投影した。
そこには赤茶けた大地と、それを連なる大渓谷が記されており、なのはは一瞬その雄大さに溜息を吐く。

「今回の調査……というより、捜査に乗りだすことになったこの遺跡みたいなものやけど……これに関する詳しいことは、アリシアにお願いしてもええ？」

はやてはレーザーポインターをモニターに向けながら振り向いてアリシアに目を向ける。

「分かったよ、はやて」

そう言ってアリシアは資料が入っていると思われる端末モニターを持って立ち上がった。

「アリシア、こういうときは言葉遣いに気をつけろ」

クロノはそんなラフなアリシアを叱るが、アリシアは全く涼しい顔をして、

「ゴメンナサ～イ」

と口だけ謝ってつかつかと彼の背後を通り抜けモニターの前へと進み出ていった。

クロノは肩をすくめ、「勝手にしろ」といって黙った。アリシアの態度に関しては毎回毎回クロノがこうして苦言を呈するが、アリシアは全くいうことを聞かず、結局クロノも諦めかけている状態だ。

「じゃあ、始めるね。この遺跡はラデオン遺跡といって、今から向かう管理外世界ではそれほど重要視されていない遺跡なんだ」

アリシアは立ったのまま正面モニターに向かい合って、画面の中央にある部分をピックアップして画像を拡大させた。

「どれが遺跡？」

なのははその映像を見て、一瞬アリシアの言う遺跡がどこにあるのか分からなかった。なのはの目から見えるのは、渓谷の一部の斜面だけで、そこは、確かに他と比べれば滑らかに削り取られているように見えるが、だからといってそこに何か人工的な構造物が見えるわけでもなかった。

「そうだね、確かにわかりにくいけど、この部分にくぼんだ所がみえない？　これがその入り口の一つで……」

アリシアはそう言いながらレーザーポインターで所々を指し示し、その遺跡の全容を皆に説明する。なのはは「んー？」といいながら目を細めて、アリシアが指し示す部分をなんとか確認しようとする。言われてみれば、アリシアの指した部分にはほんの僅かに他の部分とは違って、陰になっているようなところが見える。

しかし、それはアリシアの言うような洞穴にも見えるが、単に出っ張った岩が光の陰を作り出しているだけにも見えて、なのはは曖昧に唸るばかりだった。

「この部分が外部を関する物見台になってるんだ。自然に上手く溶け込ませた、見事なカモフラージュだよ。秘密研究所にはもってこいだね」

確かにそうだとなのはは肯いた。なのはもまたアリシアに示された部分を、まだ自然に出来たものなのか人工的に作られたものなのかを完璧に判断することが出来ないでいる。一見しただけでは分からない、言われてみても分からない。アリシアが見事だと言うのも実に納得できることだった。

「そう言えば、アリシアちゃんが調べてたのって、これ？」

ラデオン遺跡と聞いてなのはは思い出した。つい先日、食堂でアリシアがはやてに頼まれていた資料作成の題目がこれだったと。

「そういうことだね、なのは。結構手間取って、まとめるのに丸二日かかったよ。」

アリシアは既にあの時からこの作戦の為の準備をしていたのだと思い、なのはは単純に「すごいなぁ」と思うばかりだった。

「質問はもうない？　他の人は？」

アリシアはひとまずなのはが納得してくれたと仮定してそれ以外のメンバーに目をやった。クロノを筆頭にはやてもエルンストも、ザフィーラさえもアリシアに目を向けていたが、質問に手を挙げようとする人はいなかった。

おそらく一番の疑問は既になのはが聞いたと言うことなのだろうとアリシアは判断し、

「じゃあ、続けるよ」

と言って、モニターの映像とともに手元の資料を開き、改めて室内の照明を落とした。

「この遺跡自身はそれほど重要なものではないのが無限書庫の資料をもとにして出した結果だね。ジュエルシードみたいな重要なロストロギアが安置されているわけでもないし、歴史的に重要な人物が埋葬されているわけでもない。この世界でも見向きもされないような遺跡だと言っても良いよ。まあ、逆にそれだから有用なことがあるんだけどね。この遺跡ができた歴史的背景とか、そこから見えてくるこの世界の政治的、社会構造的な問題点とか色々分かったことがあるけど。まあ、そのあたりは重要じゃないから端折るとして。後から配る資料に詳しいことが書いてあるから、もしも気になったら読んでみて」

アリシアは随分饒舌にまくし立てた。その目はなのはからは血走っているように見える。

「話を進めてくれ」

クロノも心なしかアリシアの雰囲気に圧迫感を感じているようで、その表情は何となく引きつっているようになのはには感じられた。

「ごめん、クロノ。まあ、私が二日も徹夜して不鮮明な資料とか情報とか、不慣れな外国語や数百年前の古刻語を必死扱いて分析した結果、この遺跡の捜査には管理局法以外に重要視するものはないってところかな。万が一、遺跡が破損してもたぶん怒る人はいないだろうし、とにかくこの世界に人たちに見つからないようにすれば問題はないだろうというのが、私とクロノ、あとはレティ提督とリンディ義母さんの共通見解。私からは以上。何か質問は？」

二日間の徹夜ということは、いわゆるナチュラルハイというやつだろうかとなのはは思いながら、アリシアが机の上に置いたミッドチルダでは珍しい紙の資料のをチラリと見る。

そこには縦線横線斜め線が複雑に入り組んだ、なにやら幾何学模様にしか見えないものが記されており、その下部には最近になってようやく第二言語のように思えてきた現在のミッドチルダの公用語が載せられていた。おそらくその模様にしか見えない図形の羅列が下記の言葉のように翻訳されているのだろうと思うが、なのはにはどうすればそれがそのような言葉になってくるのか、皆目見当も付かなかった。

こんなものを二晩も連続で眺め続けていたら、精神病になってもおかしくない。

（アリシアちゃん……かわいそう……あんな古いものを……）

なのはは何となくアリシアが哀れに見えてきてしまった。

そして、説明を終えたアリシアはぐるっと少し演技めいた仕草でメンバーを見回した。皆、アリシアに対して何となく含みのある視

線を届けているが、アリシアはそれを特に気にすることもなく、質問も出ないことにホッとした様子で、深いため息とともに肩の力を抜いた。

「御苦労さんやったね、アリシア」

肩の力を抜くと同時にまるで体中から力が抜けていくアリシアを支えながら、はやては自分の隣に彼女を座らせた。

「うん……報酬、はずんで、ね」

クタクタと席に沈み込むアリシアは、最後にそれだけ告げて机の上にひれ伏した。珍しくしおらしい雰囲気のアリシアにはやては微笑ましさを感じたが、それでもさすが彼女は抜け目がない、と苦笑を浮かべるばかりだった。

「一言余計やなぁ……まあ、ともかくこれが今から私たちが行こうとしてる遺跡なんやけど……この画像をちょっと見て欲しい」

ぐったりとしたアリシアの背中を撫でながらはやてはそう言い、モニター上に新たな映像を映し出した。

そのその映像に映し出されたのは一人の人物の顔写真だった。そして、その顔を見た瞬間、エルンストの表情が僅かに歪んだ。身内が死のうとも眉一つ動かさないような彼が表情を歪めた。

「ああ、そうや。私らにとっては、ある意味、憎い仇。管理局と教会にとっても同様や」

はやての言葉、はやての表情がすべてを物語る。なのはもまた、それを見ては穏やかでいられなくなる。

「ふぁ……リカルド・マックフォートか……ムニャムニャ……大物、だね」

アリシアは欠伸混じりに呟く。

「聞く気がないのなら退出しろ、テスタロッサ」

どこか不真面目に見えるアリシアにエルンストは咎めるような視線を送る。

「ふぅ……そうしていいんだったらそうするよ……」

アリシアはそれ以上続けるつもりはないという風に手をヒラヒラ振ってはやてに続きを促した。

「まあ、喧嘩は後でな。今回の任務はアリシアにも参加して貰うことになるから、ちゃんときいといて」

なのははははやての言葉をきいて、「えっ？」と声を漏らしそうになった。声に出さなかったのは、あくまでミーティングの進行をこれ以上阻害しない為だが、発言が許されている状態だったら迷わず声を挙げていただろう。

（なんで、アリシアちゃんまで……）

なのははアリシアの仕事は資料を作成する所までだと思っていた。いわゆる準備の前段階で、無限書庫に連絡を取って、任務に必要な情報を揃えることが彼女の仕事であるはずだ。

しかし、はやては確かにアリシアが今回の任務に参加すると口に

した。任務に参加すると言うことは、そのまま現場に出ると言うことだ。

アリシアも戦うことになるかもしれない。

そんなことを、フェイトが許すはずがない。なのはもまた、納得の出来ないことだった。

（はやてちゃん、どういうつもりなの？）

なのははやてに少し強めの視線を送る。はやてはなのはの視線を感じ、彼女を一瞥するが、直ぐに視線をそらせてしまった。

（話はあと、か……いいよ、ちゃんとお話ししよう）

はやての言いたいことも何となく目を見て推察することが出来るようになった。尊は無しは後となのはは言われたような気がして、一度心を落ち着かせ、再度モニターに傾注した。

「リカルド・マックフォートのことに関しては、もうあえて説明する必要もないやろう。ご存じの通り、広域指名手配されてる筋金入りのテロリストや。今までこれに出し抜かれてきたのも記憶に新しい。そのせいで……殉職した人もいる……」

リカルドのプロフィール画面の脇に記載された様々な罪状が、はやての言葉を裏付ける。密輸に違法品目の売買、テログループへの質量兵器の提供から始まり、数限りない殺人容疑に違法研究への資金提供。更にはっきりとした記録には残されていないが、プレシア・テスタロッサへのクローン技術の提供さえも彼が仲介をしたという噂さえある。彼を捕らえることが出来れば、あるいはプロジェクトFの真相を解明することさえ可能となるかもしれないのだ。

「うん、ランスター一等空尉のことは、残念だったね……」

「グランセニック陸曹補もだ。もっとも、奴は殉職したわけではないがな」

アリシアとエルンストは俯いて、いなくなった二人の友人を思い出す。不幸な事故だったと言ってしまえばそれで終わりだ。しかし、かつて任務を一緒にしたティーダ・ランスターはリカルドの子飼いの魔導師の罠にはまり殺され、ヴァイス・グランセニックは逃亡中のリカルドの部下に妹を人質に取られ、取り返しの付かないミスを犯した。それのどれも、はやてが主導となった作戦において出された犠牲者なのだ。

そして、はやての関わりのない所で、管理局は多くの優秀な魔導師を彼を原因として失っている事実がある。

「せやけど、それも今回で終わりや。このリカルド・マックフォードがこのラデオン遺跡に侵入したっていうかなり信頼性のある情報を入手した」

はやてはリカルドの顔写真をモニター端においやり、もう一つの重要な写真をモニターにアップさせる。

「間違いない」

その新しい写真に写された、車から出ようとする男の顔とリカルドのプロフィール画像を比べて、クロノは肯いた。

「解析班からの答えも同じや。ここにリカルドがいる！」

はやてはそう言ってミーティングルームの照明をつけた。

「私たちの役目は、この人物を逮捕し、この遺跡で行われていると思われる違法研究を白日の下にさらけだし、その全てを摘発することや」

はやては声を張り上げ、ここに堂々と宣言を果たした。犠牲者達が報われるときが来たと、彼女は吼えた。

「今までの屈辱と怒りは少しだけお腹の中にしまっておいて欲しい。今は冷静に確実に事を進める必要がある。私はこのメンバーならそれが出来ると確信してる。今度こそ、追い詰めるで！」

『了解！』

二度と繰り返さない。ここで惨劇の本を抜く、と全員の声が重なり誓いとなって部屋に響き渡った。はやては握りしめられた手から力を抜き、そして、どさりと椅子に倒れ込むように腰を下ろした。

張り詰めた弦を緩めるような面持ちで席に沈み込むはやてを横目に、今度はクロノが立ち上がった。

「本作戦で使用するコードナンバーはＭＵＳＥＳとする。作戦責任者である僕、クロノ・ハラオウンをＭＵＳＥＳ－０とし、現場指揮官の八神はやてをＭＵＳＥＳ－１。以下のナンバーは各自のデバイスに転送するため、各自で確認のこと。何か質問は？」

質問が出なかったので、クロノはそのままブリーフィングの終了を宣言し、各自解散を命じた。この後は、各自が作戦開始時間まで情報整理と役割の確認と個人間での打ち合わせを行うことになる。

「なにかあれば呼べ。我は主の部屋で待機する」

ザフィーラはそう言って誰の返答も聞かず、のっそりと起き上がってさっさと部屋を後にしてしまった。彼の有り様は実にシンプルだ。局員でもなければ嘱託でもなく、民間協力者でもない彼は、守護獣としての使命のままに行動できる。ある意味彼がそうであるからこそ、他の夜天の騎士達が自由に動けるのである。

「俺は、武器(デバイス)の調整をする。艦長、訓練室の使用許可を」

エルンストは立ち上がり、自分なりに任務の準備を行うべくクロノに声をかけた。

「分かった。一緒に来てくれ」

クロノも肯いて立ち上がり、エルンストを伴って部屋を後にする。後で許可を出すよりは、直接クロノの手で訓練室を起動させた方が早いと思ったのだろう。クロノは提督であり、アースラの艦長であるため、現場には出ない。よって、はやて達よりは時間に余裕がある。

「……Ｚｚｚ……」

アリシアは、クロノの宣言と同時に机に突っ伏してすぐさま寝息を立ててしまっていた。

「アリシア嬢。ここで眠るより仮眠室の方が良い存じます」

会議中は全く発現しなかったリインフォースはそんなアリシアを

気遣ってか、軽く彼女の肩を揺すぶった。

「ん～？　そうだねぇ……」

しかし、その振動は彼女の眠気を後押しするものになってしまっていた。

「お連れします」

仕方がない、とリインフォースは諦め混じりに肩を落とし、アリシアの身体に手を伸ばした。

「ありがと～リイン……スゥ……」

リインフォースは七割方夢の世界に旅立ってしまったアリシアの膝裏に腕を回して抱き上げた。アリシアは「ムニャムニャ」と口を鳴らしながら、リインフォースの豊満な乳房に顔を埋め、まるで甘える猫のように、穏やかな寝息をあげはじめた。

「では、私はアリシア嬢をお運びしますので」

まるで、その姿は遊び疲れた幼子を抱き上げる母親のようだ。いや、あるいは月に昇る命を導く女神と言っても過言ではないかもしれない。

「ん？　ああ、御苦さんや。運びおわったっら私のオフィスに来て。なのはちゃんも一緒に打ち合わせしよ？」

一瞬彼女に見とれてしまったはやては、慌てて意識を仕事へと戻して告げた。

「了解いたしました。では、失礼いたします。なのは嬢も、また後ほど」

「あ、うん。お疲れ様。また後で」

リインフォースは二人に会釈して、アリシアを極力揺らさないようにゆっくりと足を勧め、閉まるドアの向こうへと消えていった。

「アリシアちゃん、大丈夫かな」

なのはは二人が立ち去った扉を見つめながらそう呟いた。眠りこけてリインフォースに甘えるアリシアは実に年相応に見えてしまった。アリシアにとってそれは異常なことだ。異常だと思えてしまうほど、普段のアリシアは大人びている。その中に精一杯背伸びをしようともがく雰囲気さえも感じさせないほど、アリシアは自然に生きている。

「あの年齢(とし)で徹夜は厳しいやろうからね。下手をすればリンディさんに叱られてしまうわ」

出来るなら、アリシアの役割を担う大人がいればいいとはやては思う。しかし、実際的にアリシアの能力は貴重なのだ。彼女は、理由は分からないが、古代ベルカ語を思考言語のレベルで操ることが出来るだけでなく、そこから派生する様々な古代文字や言語を読解することが出来る。たとえ、無限書庫の筆頭司書であるユーノ・スクライアであっても、語学の分野においてはアリシアに及ばないと言われるほどに、彼女の能力は際だっているのだ。

能力のあるものは、いかなる年齢でも活用されるべきだ。それが管理局のみではなく、ミッドチルダを始めとした次元世界の常識と

なっている。

自分たちもまた、今のアリシアほど幼い頃から管理局や次元世界の為に命をかけているのだ。今更、アリシアを現場から下ろすわけには行かない。身内の私情を挟めないほど、アリシアは有益であるとはやても認めてしまっている。それが、何よりも辛いとはやては感じる。自分たちもまた、もう既に戻れない道を歩んでいるという自覚と共に。

「ほんまに、アリシアには無理をさせてるなぁ」

「だったら、なんでアリシアちゃんまで参加させるの？　無理させたくないんだったら、こんなことしない方がいいんだよ」

「戦力が少なかったからが一番の理由やな」

「それは、そうだけど、アースラには武装隊だってあるんだから」

「この作戦は、少数やからこそ成り立つんや。武装隊をぞろぞろ引き連れていくわけにはいかへん。下手に嗅ぎつけられて、あいつを逃がすわけにはいかへんのや」

リカルド・マックフォードにたいする感情はなのはも理解できた。なのはもまた、はやてとともに殉職した人たちと出会い、願いをともにして、別れを経験してきたのだ。許せないという気持ちもある。あらゆる手段を講じてでもマックフォートを捕まえたいという感情も、なのはのにもくすぶりとしてある。

「それでも、もしもフェイトちゃんが知ったら、たぶん納得しないよ」

「怒るやろうなぁ」

はやては怒り狂うフェイトの姿を脳裏に浮かべて苦笑を浮かべた。ザンバーフォームのバルディッシュを振りかぶって、今にも自分を真っ二つにせんとする彼女の姿が、余りにも明確に想像できてしまい、かえって滑稽に思った。そんな姿のフェイトに対してではなく、それを知っていながらやめることが出来ない自分に対して。

「激怒だね。よくクロノ君が許可したよ」

「クロノ君も、立場は私と同じやからね。リカルドを逮捕することを最優先せざるをえーへんのやろう」

「だけど……」

「それに、これはアリシアが望んだことでもあるんよ」

「どうして……」

どうしてアリシアはその道を選べるのだろうかとなのはは思った。そして、同時に自分がどうしてそのみを選べないのか、なのはにはどうしても分からないことだった。

言葉を詰まらせたなのはを眺め、はやては憂鬱になる。親友を困らせるつもりはなかった。しかし、かといって自分の考えを変えるわけにも行かない。理想は常に現実に生きる自分を苦しめる。理想と現実との差を思えば喜びなど浮かんでこない。しかし、理想を持たなければ自分が歩む道を正当化できないのも確かなのだ。

（私も、どうしようもないな。グレアムおじさんのことを悪く言われへんわ）

結局自分も、彼と同様に何かを犠牲にして何かを得るような人間になるのだろうかとはやては思い。凝り固まった肩を片手で押さえた。

「私は色々と準備があるから、そろそろ行くな」

しかし、今はそれを優先する訳にはいかない。今は悩むときではないとはやては思い直し、そう言い残して部屋を後にしようとする。

「うん。私も少し休憩したら行くよ」

なのはもある程度は気分を切り替えられたのだろうか。

「よろしゅうな」

はやては、そうであればいいと思いながら、後ろ手をヒラヒラさせながら部屋から退出した。

一人部屋に残されたなのはは直ぐには行動を起こすことが出来なかった。

アリシアにはアリシアなりの考えがある。そして、アリシアは本来なら守られる側の人間ではないのだろう。

いつでも彼女は自分で決めて、自分の道を進んでいく。その歩みを、果たしてフェイトであっても止められるのかどうか。それは答えるまでもない、自明なことだ。

揺らぐことのない彼女のあり方、そして、迷いなく進んでいける

幼なじみ達の今を思い、なのははどうしようもない寂しさを感じざるをえなかった。

（私は、どうすればいいんだろう）

いつまで経っても出ない答え。もう、何度目の問いかけか数えるのもばからしくなる。

自分がここにいる意味。それはただ、か細い絆に縋り付いているだけのことなのかもしれないと何度思ったことか。

答えのでない悩みに意味はあるのか。なのはは一人ブリーフィング・ルームの窓を開き、時空間の海を眺める。海は穏やかで航海になんの障りもない。穏やかな海を眺め、どういう訳かなのはの心もどんどんと凪いでいく。

奇妙だとなのはは思った。この先にあるのはおそらく荒事であり、戦いなのだろう。それにもかかわらず、なのははまるで故郷に帰ってきたような穏やかさが胸に広がっていく。

なのははそっと首に欠けられたレイジングハートの紅い宝珠を握りしめた。

彼女の愛機は何も答えない。

「結局、私には……これしかないのかな？」

酷く乾燥した声になのははブルッと背を振るわせる。自分が行使できる魔法が、ただの荒事にしか使えない力だとしたら。それはなんて悲しいことだろうか。

認めるときが来たのかもしれない。

なのははきつく手を握りしめた。

第五話　Ｉｎｆｉｌｔｒａｔｉｏｎ

真っ暗な闇の中に、赤い非常灯だけが列をなして伸びていき、それはまるで自分たちを冥府へと誘う導光のようになのはは思えた。

レイジングハートのアクティブ・レーダーから提供された情報に基づき、ＥＰＭ（Ｅｙｅ　Ｐｒｏｊｅｃｔｉｎｇ　Ｍｏｎｉｔｏｒ：視角投影型モニター）が周囲に広がる風景を仮想的なグラフィックとして投影し、なのはの視界には暗闇にもかかわらず、周囲の様子がはっきりと見えた。

そこに浮き上がる通路には鍾乳洞のような神秘的な自然物とはかけ離れた、直線と滑らかに仕上げられた表面を持つ人工物の壁面が遠くまで続いている。

外から見れば、ここは単に赤茶けた崖に浮き出るように開けられた洞穴の一つにしか見えない。しかし、一歩踏み入れば、確かにこれは人が生み出した要塞だとはっきり理解することが出来る。

「元々あった洞窟に通路をはめ込んだんだね。突貫工事には違いないけど、堅実な設計だと思うよ」

なのはに先行して通路を行くアリシアは、そう呟きながら側の壁を撫でつけた。

「ああ、基本的な強度は自然物に持たせて、後は多少補強する程度でとどめているようだ」

なのはの背後を守るエルンストも、声を潜めながらそうアリシアに同意した。

「つまり、この廊下は最初からこの遺跡にあったってこと？　それ

だと、少し綺麗すぎないかな？」

二人の言葉をかみ砕けば、洞窟にはめ込んだような構造の廊下は何百年も前からここに存在していると言うことになる。それにしては、余りにも整備されていて清掃も行き届いているようになのはには思えた。

「つまり、違法研究者達が自分たちで使えるように掃除したってことだよ。建築様式とか色々、私が調べたラデオン遺跡の特徴と完全に一致するからね」

アリシアの言葉に、なのはは「なるほど」と肯いた。既存のものを有効活用するのは当たり前の話だ。

「しかし、本当にここに奴がいるのか？　余りにも静かすぎる。気付かれないように侵入したは良いが、歩哨の一人もいないとは、どういうことだ？」

エルンストは、腰に携えたスコープ付きのライフル型デバイス〈クリミナル・エア〉を肩に背負い直し、代わりに手に握る麻酔弾の入った拳銃の安全装置と弾倉を確認した。

「ん～、今日はお休みだとか？　それとも、レクリエーションの最中かもね」

アリシアは手持ち無沙汰に手にもつ、エルンストと同じタイプの拳銃をくるくると回しながら欠伸をつき、ヤレヤレと肩を回した。その様子は余りにも緊張感に欠けるものだったが、それを直視するエルンストが何も言わなかった為、なのはも口を挟まなかった。

「ということは……私たちは空き巣か……」

なのはもそう呟きながら、引きずりそうになるレイジングハートを持ち直し、しっかりと脇に挟んだ。なのはは二人のような非殺傷の拳銃を持っていない。というのは、なのはの仕事はあくまで周囲の監視であって戦闘ではないのだ。なのはの特性上、こういった閉鎖された空間での戦闘に適しておらず、二人のように拳銃といった質量兵器に順ずるものの扱いにも慣れていない。

「アハ。なのはも言うようになったね」

自分たちを空き巣にたとえるなのはにアリシアは笑みを漏らした。そう言われるとなのはにしても少し面白くないように思えた。何せ、アリシアに褒められたのだ。おそらく、これがフェイトなら喜びに頬を緩ませて、アリシアの頭を撫でていただろうが、なのはにしてみれば色々と彼女と会ったことを思えば、彼女に褒められることが必ずしも嬉しく思うわけではない。

「アリシアちゃんに褒められても、嬉しくないなぁ」

こういうことは普段は口にしないなのはだったが、どういう訳かアリシア相手なら特に抵抗なく言えてしまうのが不思議だった。

「もったいないなぁ。私が褒めるなんて、滅多にないことなのに」

アリシアはなのはのあまりな言いぐさに肩をすくめた。アリシアが他人を褒めることが滅多にないといわれて、なのはは小首をかしげた。

特定の人物に対しては、割とよくあると思えるのだ。特定の人物。特にフェイトやユーノに対して、アリシアはことあるごとに二人を

大げさすぎると思えるほど絶賛する。それは、彼女にとって褒め言葉ではないのだろうかとなのはは思い、溜息を吐きながらヤレヤレと首を振る小さなアリシアを見おろして、聞いてみることにした。

「フェイトちゃんやユーノ君のことは、わりとよく褒めてるよね？　あんまりもったいないって思えないんだけど？」

「ん～？　別に二人のことをことさら褒めたことはないよ？　私は、当たり前の事実しか言ってないと思うけど……」

「この姉バカめ」

吐き捨てるように言うエルンストになのはは「あはは……はぁ……」とため息のように笑った。

アリシアは身内には甘い。それは、公私混同をするという事ではないが、プライベートでは特に弟妹であるユーノとフェイトに対してはダダ甘だといっても良いほど甘やかす癖がある。

その為、中学ももう2年生になるあの二人が、まだ微妙に姉離れ出来ていないのだ。

「エルンストは一言多い。ユーノとフェイトが可愛いのは疑いようのない事実なんだから、仕方が無いじゃない！」

アリシアは声を荒げるが、潜入捜査の特性上余り声を大きくするわけにはいかないため、彼女の背の低さも相まってエルンストには全く迫力というものを感じ取れなかった。

少しの間言い争いをするアリシアとエルンストを横目に、なのはは溜息を吐きながら、ＥＰＭに映る情報の移り変わりを見逃さないように少しそちらに集中した。

（うん？）

視界の先に、何かが映ったような気がして、なのはは少し眉をひそめた。

そして、なのはは立ち止まり、アリシアとエルンストを手で制して二人の足を止めた。

「何か見つかったか？」

雰囲気の変わったなのはの様子にエルンストは油断亡く拳銃を構え、全周に対して警戒心を高める。アリシアも同様になのはの視線の先に銃口を向け、膝を立ててその場にしゃがみ込んだ。

「ちょっと待って、調べるから……」

デバイスにアクティブレーダーとＥＰＭを持たないエルンストに、デバイスを常時展開しておける余裕のないアリシアではなのは程の視界を得ることは出来ない。

なのはは落ち着いてレイジングハートを軽く前方に掲げた。

『レイジングハート、イルミネーターを低出力で照射してみて』

《了解》

レイジングハートはなのはの命令を忠実に実行し、自身が制御するイルミネーターの一基を待機状態から高速に起動させ、最低出力でなのはの前方面に対して走査を開始した。

《生体反応確認。ロックオン完了》

レイジングハートの声と共になのはの視界には、僅か前方の少し高い場所にオレンジの光点が出現した。
友軍を示すブルーではなく、敵を示すレッドでもない。未確認目標を示すオレンジの光。状況を考えれば、あれは排除するべき目標であることは確かだが、なのはの視野ではまだそれを本来の輪郭として捕らえることは出来ない。

『どう？』

足もとからアリシアの念話が聞こえてくる。アリシアからはまだなのはが見ている目標は確認できない。

『前方、少し上の方に未確認目標を確認した。だいたい、２０メートルぐらいかな？』

『歩哨か？』

『たぶん……だけど、未確認』

『分かった、私が先行して確認するよ』

アリシアはそう言って、銃のスライドを僅かに引き、その中に初弾が装填されていることを確認すると、聞き手ではない右手を懐にいれて、一枚のカードを取り出した。

『スーパーホーネット、ＥＰＭ起動。情報をレイジングハートと共有して私の視界に投影して』

《ＯＫ》

アリシアの持つカード……待機状態のデバイス《スーパーホーネット》は短く音声を出して、一瞬だけその中心のランプを点滅させた。

スーパーホーネットとはリンカーコアを持たないアリシアでも最低限の魔法を扱えるように新開発されたデバイスであり、老デバイスマスターであるキハイル・メースの最高傑作と呼ばれるものだ。

アリシアは、視界が切り替わったことを確認するとスーパーホーネットをもう一度懐にしまい込み、視線をあげて、なのはが見ていた未確認目標に視線を移した。

さっきまで全く視界の通らなかった廊下が、鮮やかな色彩で視界に投影され、アリシアは「ヒュウ」と口笛を吹いた。

（やっぱり、キハイル先生は天才だ！）

アリシアは心の中でデバイスマスターの師匠であるキハイルに称讃を贈りながら、ゆっくりと立ち上がった。

『じゃあ、なのははそのままあれをロックオンし続けて、レイジングハートはリアルタイムでスーパーホーネットに情報供給を。エルンストは、なのはをしっかりと護っててね』

『俺が狙撃してもいいんだが？』

エルンストはそう言いながら、肩に提げたライフルに手を回した。

彼の狙撃技術であれば、スコープにレイジングハートの情報を回せば、たとえ目標が視認できなくても、たかが２０メートルなどという距離はないにひとしい。

彼なら、おそらく、目標を気付かれることなく排除できるだろう。

『それは、最終手段だよ。中にいる人たちは、出来る限り生きて捕らえるってはやても言ってたでしょう？　大切な証人を簡単に死なせちゃダメ』

果たして、こんなところで一人で立っている人物に、証人の価値があるかどうかは不明だが、不明である以上、その通りに扱わなければならないのも事実だった。

そして、管理局の基本的な理念は「犯罪者は殺さず、法廷にたたき出されなければならない。犯罪者が死ぬのは罪を償ってからだ」である。

『了解だ、テスタロッサ。お前に任せる』

エルンストはそう言ってクリミナル・エアを構え、スコープを覗き込んだ。アリシアの指示に従うことを決めたとしても、万が一のことを考えてエルンストはクリミナル・エアに実体弾頭を装填させる。

管理局の理念は理解しており、エルンストも管理局に所属する以上それに最大限に従う必要がある。しかし、その理念はまた絶対的でもなく、その項目には「民間人及び局員の生命が危険にさらされていない限り」という但書がつく。

万が一、任務に差し障りのある行為を目標が取ったのなら、万が一アリシアが命の危険にさらされたのなら。エルンストは迷うことはないだろう。

「じゃあ、行ってくるね」

アリシアはエルンストのその思惑を正確に理解しながら、に二人に向かってニコリと笑いかけ、そして、姿勢を低くしてゆっくりと、足音さえも立てずに壁づたいに歩き出した。

『大丈夫かな』

なのはのＥＰＭにはアリシアの姿がしっかりと示され、イルミネーターによって彼女の身体には青色の光点が示されていることも確認できる。

『おそらく問題はない。テスタロッサはこの手の任務には熟達している。それに、万が一の場合も俺がいる。どう転んでも任務は続行可能だ』

確かに潜入工作に関しては、仲間内ではこの二人にかなう人間はいない。エルンストは、狙撃手として偵察任務に長けているうえに、このようなステルス任務に関しても特殊な訓練を受けているため、彼なら庭の散歩をするような感覚で潜入し、生還することが出来るだろう。

アリシアに関しては、分からない。どうして、アリシアにはエルンストも認めるような技能があるのかなのはには分からないが。エルンストが認める以上、心配はないのだろう。

（なんで、私はここにいるんだろう？）

そして、なのはは自分の立ち位置を見いだせなかった。

はやては自分を切り札だと言って同行を命令したのだが、なのはとしては正直、自分は二人にとって足手まといにしかならないだろうとしか思えないのだ。

『こちらアリシア。目標にアプローチ成功。スーパーホーネットから情報を送るね。確認して、判断お願い』

なのはの悩みはそっちのけで、アリシアから実に落ち着いた声が届けられた。

『了解だ、高町、モニターに回せ』

『あ、うん。レイジングハート、お願い』

《了解、お二人のモニターに投影します》

レイジングハートはそう短く答え、僅かの時間も待つことなく、視界の一角が切り取られるように四角い補助モニターが出現し、そこから若干不鮮明ながら、暗がりの中に浮かぶ人物の姿が映し出された。

その人物はまだモニターの方には気が付いていない。見れば、随分豊かな体躯をした男性のようで、肩からつるされた何か長いものを脇に抱えているように思えた。

『間違いない、アサルト・ライフルだ』

エルンストはその不鮮明な影像からもそれをはっきりと断定した。なのはもそうみればそう見えない事もないと思い、同意をした。

『うん、私もそう思う。事件資料にあった、地球のアサルトライフル。アブトマット・カラシニコフのコピー製品に間違いないと思うよ』

カラシニコフ銃と聞いて、なのはは故郷で有名なテロリストのライフルを思い出した。

『なんで、地球のがこんな処に？』

『構造が単純で、頑丈。誰にでも扱えて、しかも信頼性が高く、生産しやすい。ここまでテロリストにあった武器はそうはないだろう』

それが同時に、質量兵器の恐ろしさだとエルンストは呟いた。

『それに、裏のマーケットで４０ミッドガルド以下で手にはいるから、調達しやすいんだよ』

なるほどとなのはは呟いた。確かに、自分の小遣い程度の値段で手に入ってしまうような武器など、世界中に拡散しても仕方がないだろう。そして、同時に自分の出身世界がそう言った次元世界でのテロリストへの武器の拡散に貢献してしまっていることをなのはは悲しくなった。

『じゃあ、排除するね。エルンストは警戒をお願い』

『了解した。よく見えている』

エルンストはトリガーから浮かせた指に力を入れ、セイフティーロックを解除した。

『気をつけて』

なのははそう伝え、身体を硬くした。アリシアからの返事はない。それどこか、アリシアは先ほどの念話を最後に通信を切っている様子だ。

アリシアの光点は徐々に徐々にオレンジから赤に変わった光点に近づいていく。

じりじりとじりじりと、まるで目隠しをしようとする鬼のように。

『排除完了。二人ともここまでこれる？』

遠方よりドサリと重たいものが地面に落ちる音が耳に届き、そして、アリシアの念話が届き、なのははようやく肩から力を抜くことが出来た。

エルンストは「気を抜くな」と短く言い、念話でアリシアに『了解、先行する』と告げ、そしてなのはを背中に護るように姿勢を若干低く保ちながらゆっくりとライフルを突き出す形で前に進み始めた。

なのはもまた、緊張感を取り戻しながらエルンストがライフルを構える方向とは異なる方向へ、イルミネーターを向けながら、彼と背中合わせになる形でゆっくりとアリシアが待機しているであろう場所へと足を進めていった。

「お帰り」

抜き足差し足で近づく二人に、アリシアは手に持つ電磁警棒（スタンロッド）を振った。

その足もとには、カーボンナノチューブ製のワイヤーで拘束された男が、口から泡を吹いて倒れている。

「電流を流し込んだのか。たしかに、薬で眠らせるよりは確実だが……殺してないだろうな？」

エルンストはアリシアの弛緩しきった様子に肩をすくめながら、ライフルを下ろし、足もとの歩哨の首筋を触った。

「そんなヘマはしないよ。といっても、丸一日は気絶しっぱなしだ

と思うけど」

アリシアは苦笑いをしながら、手に持っていた長い棒状のものをなのはに向けて投げ付けた。

「わわっ！　なに？　って、これ鉄砲じゃない！」

いきなり腕にかかる重い鉄の感触に、なのはは目を白黒させ、思わずそれを取り落としそうになってしまった。

アリシアが投げ付けたものは、足もとで眠る歩哨が持っていた質量兵器、アブトマット・カラシニコフのコピー銃だった。

「弾は抜いてあるから安心して」

「こ、これをどうするの？」

「証拠品だよ。これを詳しく調べれば、地球からの密輸ルートが分かるかもしれないでしょう？　しっかりしてよ、執務官補佐！」

「あっ、そうか……分かった、レイジングハート、収納できる？」

《少し重いですが、何とかしましょう》

「ありがとう」

レイジングハートはなのはの要求に応え、しばらく沈黙して自身の内部容量を整理すると、なのはの手の中のライフルを淡い光で包み、サイズを縮小させて自身の内部に取り込んだ。

《満腹です。もう入りません》

冗談じみたレイジングハートの音声に、アリシアは若干肩をすくめつつも何も言わず、手に持っていたスタンロッドを縮め、腰のパウチに差し込んだ。

「さて、先に進もう。私が先行して、なのはが真ん中、エルンストがしんがりでよろしく。少しペースを上げていくから、しっかりついてきてね」

アリシアはそう言ってスタンロッドの代わりに同じパウチに差し込んでいた拳銃を取り出し、顎でその先の道を指し示した。

歩哨が無力化された事に連中が気が付くまでどれだけ先行できるか。

ここからは時間との勝負だとなのはは思いながら、アリシアに対して神妙な表情を作りながら肯いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2806n/

魔法少女リリカルなのは〜Nameless Ghost〜（Route NORN）

2010年12月12日07時36分発行